

俳句の街 まつやま
俳句ポスト365

作品集2018



生誕150年

since 2017

— 松山から世界へ
そして未来へ —

<http://haikutown.jp/>

制作
松山市

俳句の街 まつやま 俳句ポスト365 作品集2018

— 掲載回一覧 —

		投句募集期間	選句結果掲載日
第164回	わらびがり 蕨狩	2017/1/26 ~ 2017/2/8	2017/3/13 ~ 2017/3/17
第165回	わたぎよふ 渡り漁夫	2017/2/9 ~ 2017/2/22	2017/3/27 ~ 2017/3/31
第166回	雲	2017/2/23 ~ 2017/3/8	2017/4/10 ~ 2017/4/14
第167回	なはな 菜の花	2017/3/9 ~ 2017/3/22	2017/4/24 ~ 2017/4/28
第168回	はくしよ 薄暑	2017/3/23 ~ 2017/4/5	2017/5/8 ~ 2017/5/12
第169回	あおしば 青芝	2017/4/6 ~ 2017/4/19	2017/5/22 ~ 2017/5/26
第170回	ぼうしゆ 芒種	2017/4/20 ~ 2017/5/3	2017/6/5 ~ 2017/6/9
第171回	しろぐつ 白靴	2017/5/4 ~ 2017/5/17	2017/6/19 ~ 2017/6/23
第172回	ひやけ 日焼	2017/5/18 ~ 2017/5/31	2017/7/3 ~ 2017/7/7
第173回	しゅうおうしき 秋櫻子忌	2017/6/1 ~ 2017/6/14	2017/7/17 ~ 2017/7/21
第174回	なごし 夏越	2017/6/15 ~ 2017/6/28	2017/7/31 ~ 2017/8/4
第175回	ひぐらし 蝸	2017/6/29 ~ 2017/7/12	2017/8/14 ~ 2017/8/18
第176回	きくびより 菊日和	2017/7/13 ~ 2017/7/26	2017/8/28 ~ 2017/9/1
第177回	いわし 鰯	2017/7/27 ~ 2017/8/9	2017/9/11 ~ 2017/9/15
第178回	はぜもみじ 榎紅葉	2017/8/10 ~ 2017/8/23	2017/10/9 ~ 2017/10/13
第179回	からすうり 烏瓜	2017/8/24 ~ 2017/9/6	2017/10/23 ~ 2017/10/27
第180回	まいたけ 舞茸	2017/9/7 ~ 2017/10/4	2017/11/6 ~ 2017/11/10
第181回	ひれざけ 鰯酒	2017/10/5 ~ 2017/10/18	2017/11/20 ~ 2017/11/24
第182回	みずか 水潤る	2017/10/19 ~ 2017/11/1	2017/12/4 ~ 2017/12/8
第183回	すみ 炭	2017/11/2 ~ 2017/11/15	2017/12/18 ~ 2017/12/22
第184回	たんばい 探梅	2017/11/16 ~ 2017/11/29	2018/1/15 ~ 2018/1/19
第185回	ラグビー	2017/11/30 ~ 2017/12/13	2018/1/29 ~ 2018/2/2
第186回	あおさ 石蓴	2017/12/14 ~ 2018/1/10	2018/2/12 ~ 2018/2/16
第187回	しゃぼん玉 ^{だま}	2018/1/11 ~ 2018/1/24	2018/2/26 ~ 2018/3/2

蕨狩

《春》蕨は、春を告げる山菜として代表的なものが、それを行楽として摘みに野山に出かけることをいう。

天

磐座の紙垂は四枚蕨狩

クラウド坂上

人事の季語「蕨狩」と植物の季語「蕨」の違いを考察してきた今週。蕨を探し歩く楽しさ、その情景、人物、場所など、「蕨狩」らしさという点を選句のポイントにしたいと考えておりました。

「磐座」は、神の御座所。大きく美しい岩に神が宿るという岩石崇拜では、その巨石のある場所は聖域とされます。自然の巨石を惚れ惚れと見上げる時の、ハツとする、ギョッとする感知が、神の存在への意識なのでしょう。

「紙垂」とは、注連縄や玉串などに垂らしてある白い紙です。「磐座」に付けられた「紙垂」は聖域を三す象徴。「蕨狩」してたどり着いた場所には、美しい巨岩が祀られています。その「磐座」には真新しい「紙垂」が「四枚」垂れているのです。その巨岩の辺りには、沢山の「蕨」が生えているのですが、採るために近づくことが憚られるような神聖な空気が満ちています。

見上げれば見上げるほど大きな岩、見つめれば見つめるほど美しい巨石、圧倒的な大きさと美しさに「蕨狩」の面々は立ち尽くしているに違いありません。時折ひらりと風になびく「紙垂」もまた、神意を伝えているかのような厳かさ。ここの「蕨」には手を出さまいと、拝礼をして去っていくのかもしれない。

地

祟り神に触れ来し右手蕨狩

耳目

同じ「神」でも、「祟り神」に遭ってしまった人もいるようです。ただの石ではなさそうな石の根元に「蕨」が沢山生えているのを見つけたのでしょうか。石に近づき、うっかり「右手」をついて採った「蕨」ですが、よくよく眺めてみると、どうもこの石は「祟り神」のようではないか……。なんとなく「右手」がじんじんと熱くなってくるような気がする、そんな「蕨狩」の一場面です。

空堀と知らず蕨を狩り登る

ゆきたま

あ、こんなところに「蕨」があると、地面ばかり見て夢中で採っていたのでしょうか。土手のような斜面を「狩り」ながら登っているうちに、ひよっとしてここは「空堀」なんじゃないか、と気づいたのです。下五「狩り登る」という複合動詞の使い方が巧い一句です。

蕨狩おとこ古墳を滑り落つ

小泉岩魚

こちらは、逆に「滑り」落ちていきます。「蕨狩」の一行は、ついに丘の「古墳」へと到達します。「古墳」の斜面は「蕨」だらけのポイント。この「おとこ」は蕨を採っているうちにうっかり滑り落ちてしまったのか。誰よりも先に「古墳」の斜面に挑もうと自ら滑り下りていった様子を敢えて「滑り落つ」と表現したか。これらもまた「蕨狩」の一場面です。

蕨狩るちちははの船戻るまで

Kかれん

「ちちははの船」は魚を採るための船でしょうか。海へ、あるいは川へ、湖へ漕ぎだした「ちちははの船」を待つ間、子どもたちは「蕨」を狩りつつ遊んでいるのでしょうか。やがて昼時となれば、「ちちははの船」は岸に戻り、子どもたちと共に昼の弁当を開くに違いありません。採れた「蕨」を誉めながら、楽し気な昼餉が始まるのです。

蕨狩行つて還らぬ夢のはは

くらげを

こちらの「はは」は切ない。もう亡くなっている母でしようか、失踪した母、心の通わなくなった母、記憶がなくなってきた母かもしれません。「はは」を思う時、かの日の「蕨狩」の場面ばかりが、なぜか思い出されてしまう。「夢のはは」は「蕨」を探して、振り返ることもなく山の奥へ奥へと入っていくのでしょうか。子を置いて遠ざかる「はは」を呼ぶ我が声に、ハツと目覚める「夢」の幾夜。

蕨狩迷いし人の籠重し

蛾触

人数を数えてみると一人足りない。「蕨狩」をしながら山に迷い込んでしまった「人」がいるのです。皆で心配し、探しているうちに、当のご本人は悠々と「籠」を担いで現れます。誰よりもたぐさんの「蕨」が入っている「籠を重し」と言い切ることで、やれやれ人騒がせな……という思いと、安堵の思いとが交錯します。

蕨狩る老女五人は無敵なり

津軽まつ

「蕨狩」となればこの「老女五人」に敵う人間はいないのです。足腰も丈夫で、要領もよくて、賑やかで、何よりも「蕨」の群生している場所を熟知している「老女五人」。皆で共有しているポイントもあれば、自分だけが知っているポイントもあるに違いありません。「無敵なり」と言い切ったところにユーモアも生まれます。

早蕨の狩と呼ぶにはうぶうぶし

めいおう星

「早蕨」は植物の季語ですが、このような書き方をすれば、「蕨狩」のエリアに入ってくるという一例です。蕨狩には少し早いかたと出かけてみると、「早蕨」が顔をだしている。「蕨狩」というにはなんとも幼気なさまを「うぶうぶし」と表現したのが巧いですね。「狩と呼ぶには」という言い回しにも味があります。

わらび狩ばき春の骨を折る

花屋

季重なりですが、面白い一句。「わらび狩」の感触を「ばきばき」というオノマトペで表現する句は幾らでもありますが、その「ばきばき」は「春の骨を折る」感触だよと感ずるところに、独自の感受があり、楽しい詩があります。

渡り漁夫

わた ぎよぶ

《春》仕事を求めて渡り歩く漁夫のことで、主に春の鯨漁に従って出稼ぎに北海道に渡った東北地方の農民をいう。かつては、群れをなして押し寄せていた鯨の漁のために漁夫が集められ活況を呈した。

天

渡り漁夫夢に哀しき牛と妻

香壺

ニシンの漁期が近づく春先、北海道の網元に雇われて海を渡る漁夫たちが「渡り漁夫」。東北地方の農民が多かったそうです。他の漁師ではなく、季節労働者としての「渡り漁夫」をどう描くのか。難しかったですね。

「渡り漁夫」らしさを、「東北の農民が多かった」という事実に求めたのがこの句。元々は農民ですから、恋しいのは海ではなく、土。そして、先祖伝来の土地を共に耕してきた「牛と妻」なのです。

ならば「夢に恋しき牛と妻」と書いてもよさそうなものですが、「渡り漁夫」の働く過酷な現場は、悠長に「恋しき」と詠嘆していられるようなものではなかったでしょう。大地を離れ、海に綱引く我が身の辛さ、しんどさ。まだまだ雪に閉ざされているに違いない故郷で、「牛」の世界をしつつ、父母子どもと懸命に留守を守ってくれる「妻」を思うにつけ、「哀しき」という感情がひたひたと心に満ちてくるのです。

地

場と状況と人物を二気に伝える「渡り漁夫」という季語の後に、「夢に哀しき」と抽象的な中七を置き、最後に「牛と妻」と極めて具体的な生き物と人物を出現させる。この語順が一句の要。よく考えて仕上げられた作品です。

渡り漁夫云う魚群は黒き雪崩だと

ぐわ

「渡り漁夫」と同じ現場の季語として「鯨群来」があります。産卵期のニシンが産卵地北海道西岸に回遊して行くことを意味します。雌が産んだ卵に、雄が放精するため、海の色が乳白色になるのが群来の現象。私はまだ観たことのないのですが、想像するだけで凄いなあと思います。

そんな鯨の群れを、「渡り漁夫」たちは「黒き雪崩」と語るのだという一句。この「黒き雪崩」がやがて、産卵・放精によって乳白色に変わることまでが想像できる、迫力のある作品です。

同時投句「風の名を覚え三年渡り漁夫」にも惹かれました。

渡り漁夫なぶらに放り込む山気

かもん丸茶

「なぶら」小魚の群れがフィッシュイーター（ハマチやブリ、スズキなど）に追われて、局所的に海面にさざ波立てて逃げる様子」なのだそうです。「山気」は山師のような氣質、辞書的にいえば「万一の幸運を頼んで、思い切った事をしようとする心。やまき」という意味になります。

実際に「なぶらに放り込む」のは漁網ですが、それを「山気」を放り込むのだと言い切ったところにオリジナリティがあります。鯨は宝の山とも言われた時代を思う時、「山気」という言葉はかの時代ならではの臭気をもって、私たちの前に立ち現れます。

目頭の塩穿りたる渡り漁夫 さるぼぼ@チーム天地夢通

「穿り」とは、よく言い放ったものです。網を引く飛沫、鯨の跳ねる潮が「目頭」に溜まり、固まり、「塩」と化し

ているというリアリティ。それを「穿りたる」のは、網を引き揚げ終わってホッと一息ついた頃でしょうか。乾いて硬くなった「塩」をこりこりと取る指の感触をリアルに追体験させる作品。最後に「渡り漁夫」という季語が出現することによって、北海道の春荒れの海かもしれないという想像も広がります。

雪浴びてしよっぱき軀渡り漁夫

うに子

「雪」との季重なり。三季季語の一つである「雪」は大きな世界を持っているのですが、それを脇役に据えて「渡り漁夫」を主役として描いた、巧い作品です。海の「雪」をさんざん「浴び」た己を「しよっぱき軀」と味覚のイメージで表現したリアリティ。「浴び」という動詞の効果もよく見極めていきます。

ここらとは違う日焼けの漁夫来たる

三重丸

「ここらとは違う日焼け」という把握にリアリティがあります。言われてみると、「日焼け」にも様々な特徴があるよな、と納得。潮焼けの赤茶けた日焼けではなく、農業に従事する人たちの日焼けはもう少し穏やかな感じ。「渡り漁夫」ではなく「漁夫来たる」という表現も、この場合は適切ですね。

所詮渡り漁夫だと母に諭される

こま

この二行だけで、ドラマが一本撮れそうな一句。気風もいいし、男前だし、優しいところもあるが、「所詮」は「渡り漁夫」なのだよ、と娘を諭す「母」。が、その「母」もかつては「渡り漁夫」に恋い焦がれた若き日があったのかもしれない。ひよっとすると、作中の娘こそが「渡り漁夫」の子？……なんて妄想が次々に広がってしまいました。

潮騒の揺らすラムプや渡り漁夫

糖尿猫

「潮騒の揺らすラムプ」という陰影、かすかな潮の匂い。

雲

美しい表現ですから、海辺の別荘かしら、お洒落な店かしら……と想像させておいて、中七「や」の切れの後に出現するのが、下五「渡り漁夫」。この語順の効果、巧いですね。季語が出現したとたん、別荘もお店も消えて、鯨魚の番屋となる。そのとたん、ムツと鼻を衝く魚臭もしてきます。そこに「渡り漁夫」の悲哀も揺れ始めるのです。

死者四人同じ苗字の渡り漁夫

永井潤一郎

「死者四人」が「同じ苗字」であるという事実。親子だったか、兄弟だったか、その一人は叔父であったか。農閑期の稼ぎとして渡ってきた北海道の海で命を落とした「渡り漁夫」たち。引き上げられた遺体を呆然と眺める仲間の漁夫たち。訃報が故郷に届く日の悲しみまでもが想像される一句です。

渡り漁夫番屋に病みて炉を守る

留野ばあば

体調を崩して漁に出られない「渡り漁夫」もいるに違いありません。働ける働けないは、当然賃金に跳ね返ってくるはず。番屋に病みて」という中七で状況が端的に読み取れ、「炉を守る」という下五によって人物の姿が描写される。一語二語が丁寧に選ばとられている作品です。

渡り漁夫ケロリン売るほど持ちました

初蒸気

「ケロリン」とは解熱鎮痛薬の名前。大正14年に誕生したこのことですから、日本の家庭薬としての歴史はそれなりに長い。

大正時代は鯨魚が大規模になっていったようですが、鯨の来遊が南から順に次第に途絶え、昭和30年代には北海道でも激減したとのこと。となると、この「渡り漁夫」は昭和の初めから20年代までぐらいを生きた人物ということになりそうです。

頭痛持ちの「渡り漁夫」にとって、「ケロリン」は無くしてはならない戦友。「売るほど持ちました」は、この作家お手の物のユーモアですね。

天

ほんとうは雲から落ちてくる雲雀

檜の木

兼題「雲」は季語ではありませんから、「雲」のつく単語を探して別の季語と取り合わせるか、「雲」のつく季語を探すか。まずは二つのアプローチが考えられます。が、「雲」を二つ入れている、こんな発想もある！ってこと、勉強になりますね。

難しい言葉は一つもありませんが、「雲雀」ってほんとうは雲から落ちてくるんだよ、という詩句に、ハッと心を衝かれます。

私たちが知っている「雲雀」は、春を告げる明るい高音の囀り。空へ向かって何度も何度も上っていく姿から傍題「揚雲雀」も生まれました。生物学的にいえば、あれは繁殖期のオスの縄張り宣言だ、という説明で終わるのでしょうが、掲出句の「ほんとうは」から始まる詩句が伝えるのは、虚構の世界に現れる詩的現実です。

ねえ知ってるかい、「雲雀」って「ほんとうは雲から落ちてくる」んだよ。だから、何度も何度も高く高く飛び上がって「雲」のある場所に戻りたがってるんだ。だからほら、「雲雀」の声って、息も付けないほどチュルチュルピチュルピチュルって、痛そうに鳴き続けているのだろ。

そうか、春を喜ぶ音色だと思っていた「雲雀」の囀りは、かつて自分がそこにいた空を恋う、痛切な叫びなのだ……と思われてならなくなる。それが詩というものの力なのだと、実感した作品です。

地

桃の花雲の真下は暗けれど

ドルチェ
dolce

「桃の花」が満開の時の明るさといったら、この世のものではないような美しさです。桃源郷という言葉思い出しつつとりします。「桃の花」が咲き満ちる日、「雲」は春の訪れを喜ぶかのようにゆっくりと動いては、去っていきます。「雲の真下」の昼のほの暗さのなかで、「桃の花」はその花芯をさらに美しく濃くさせるのです。

つくしから生まるるならば今日の雲

くらげを

「今日の雲」はあっちこちに伸びてる「つくし」みたいだなあって、笑っているのでしょうか。「つくし」がニョキニョキ伸びるような形の雲？ 摘んだ「つくし」を寝かせたような形？ 「つくし」の頭みたいな雲？ いろんな雲を想像するだけで楽しくなってきました。こんな発想が生まれるのは、春の野に寝っ転がっている時でしょうか。さあ、皆さん、歳時記を携えて、野に出てみましょう♪

壇に飼ふ夕べの雲や春果てぬ

与志魚

「壇に飼ふ」という措辞は、「凍蝶を過のごと瓶に飼ふ／飯島晴子」を思わせませんが、内容は全く違います。「壇」に飼っているのは「夕べの雲」です。「壇」の向こうに夕暮れの雲が見えているのかもしれないし、「夕ぐれ雲」をひっそりと「壇」に閉じ込めて飼っているという虚構の世界かもしれない。「春果てぬ」という抒情が、上五中七の詩句をさらに美しいものにします。

春の雲へ空き瓶のくち一ダース

剣持すな恵

同じ「瓶」でも全く違う発想です。「春の雲へ」向かって並んでいるのは「空き瓶のくち」。しかも「一ダース」の口が並んでいるのです。「空き瓶」の一つ一つは、「春の雲」を映すでもなく吸い込むでもなく、ただそこに在るだけ。「一

ダース」十二個の「口」が「春の雲へ」向かって開いている、ただそれだけなのに、愉快にしてシユールな光景。こんなモノが俳句になるのだという発見の一句でもあります。

蒿苳割るや星雲どつと回りだす

ととお

「蒿苳」はレタスです。「割る」の一語から、洗っている場面を想像しました。「蒿苳」を両手でグツと割るときの感触は、我が手が、まるで創造主となって「星雲」を作り出すかのような手ごたえ。「どつと回りだす」という表現が、「蒿苳」と「星雲」の時空を繋ぎます。洗う「蒿苳」の水は、「星雲」の星々のように光り弾けます。

同時投句「雲母引の髪にほやかに朝寝せる」にも惹かれました。「雲母引」という比喩のなんと甘やかなことか。

雲梯にぶらさがつてる春シヨール

比々き

「雲梯」には忘れ物の「春シヨール」が「ぶらさがつて」います。「春シヨール」を身に着けているのですから、少し肌寒く感じられる日だったのでしょう。「春シヨール」を外して何気なく「雲梯」に掛け、そのまま忘れてしまったことは、子どもと遊んでいたのか、太陽が照り始めたか、おしゃべりしてうちに忘れたか、はたまた思わぬ人との再会か……。いろんな想像を楽しませてもらいました。

雲の小片集める春のビルヂング

28 あずきち

ビルの窓ガラスに「雲」が映っているという句は幾らでもあるのですが、「雲の小片」という表現にささやかなオリジナリティがあります。仕切られた窓に映る雲を「春雲の小片」といわず、後半にて「春」という季語を独立して使ったのも工夫ですね。「集める」という擬人化も成功。「春」を体現しているかのような総ガラス張りの「ビルヂング」。七七五の調べも、句の内容に似合っていますね。

流水の雲踏み砕く春の駒

ウエンスデー正人

「春の駒」とは「若駒」の傍題で、その春に生まれた馬を意味します。意味は同じでも、季語「馬の子」「子馬」とは語感が全く違います。「若駒」「春の駒」は、古風な味わいを生かしつつ、今年生まれた馬の元気を表現しないといけません。実に難しいのです。

掲出句の工夫は「流水」から始まるイメージの作り方。「流水」は文字通り、流れる水です。水が流れているのかなと一瞬思わせつつ、「流水のように流れてゆく雲」「流水に映る流水のような雲」とイメージを重ねて読むことも可能。さらに中七「踏み砕く」で動きがでてきますね。そして、何が「流水の雲」を「踏み砕く」のかと思えば、下五「春の駒」という季語が出現するわけです。古風な季語の持つ味わいを生かしつつ、今年生まれた馬の潑刺たる様子も表現するなるほど、こうきたか！という一句でありました。

春雲滔滔野を翳すヒンデンブルク

めいおう星

「ヒンデンブルク」とは、大型硬式飛行船ヒンデンブルク号でしょう。爆発事故を起こしたことで知られています。ネット辞書には、以下のような解説。【ヒンデンブルク号爆発事故 (Hindenburg Disaster) とは、1937年5月6日にアメリカ合衆国ニュージャージー州レイクハースト海軍飛行場で発生したドイツの硬式飛行船・ LZ 129 ヒンデンブルク号の爆発・炎上事故を指す。】古い映像ニュースを初めて見た時は、子ども心にショックを受けました。「ヒンデンブルク」という名詞に、どこか悲劇的な響きを感じました。

上五「滔滔」、大辞林には以下の解説。【①水が勢いよく、また豊かに流れるさま。②よどみなく話すさま。弁舌さわやかなさま。③物事がある方向によどみなく流れゆくさま。】この言葉は、「春雲」が豊かに動いていく様子を表現しています。

単語の意味が解つてくると、二句を解釈できます。なんと、掲出句は80年前の「ヒンデンブルク」を脳内でありありと見ているのです。あの日の「春雲」は「滔滔」と流れていたよ。

野には「ヒンデンブルク」号を一目見たいと、人々が手を振っていたよ。「ヒンデンブルク」号の機体は、「野」に大きな影を作っていたよ。そして、その影が一瞬にして爆発する瞬間が、近づいてくるのだよ。

過去のある時代の事故をこんな言葉で、詩として表現する。いやはや、大した力技ではありませんか。

第167回 2017年4月24日週掲載

菜の花

な はな

《春》アブラナ科の葉菜には様々な種類があり、春になると黄色の十字状の四弁花が茎の先に群がって咲くが、特に油菜の花のことを指している場合が多い。

天

菜の花やメルトダウンは千年前

このはる紗耶

一読、ギョツとします。「菜の花」「メルトダウン」「千年前」三つの単語を、二つの助詞がつかないでいるだけの句ですが、その内容の奥行にギョツとします。

「メルトダウン」という言葉をおさらいしておきましょう。コトバンクには以下のような解説。【メルトダウンは炉心溶解とも呼ばれる原子炉の重大事故の一つ。冷却系統の故障により炉心の温度が異常に上昇し、核燃料が融解すること。燃料の大部分が溶融し、圧力容器の底に溜まった状態をメルトダウンとし、高温により圧力容器の底が溶かされて燃料が容器の底を突きぬけることをメルトスルー（溶融貫通）と呼ぶ。】日常報道に「メルトダウン」という用語が使われる現実。今更ながらに怖ろしいことです。

季語「菜の花」は、一本一花ではなく、咲き広がるさまを想像させます。上五「菜の花や」は、広々とした菜の花畑と、そこに差す春日や春風をも思わせませす。「や」は強調・詠嘆の意味を發揮しつつ、カットを切る役目もします。

そして、切れ字「や」の後にでてくる「メルトダウン」

という禍々しい単語。さらに下五へと続く意味を読み取れば、「メルトダウン」の事故が起こったのは「千年前」であったことが分かる。「千年前」の「メルトダウン」とは、まさに私たちが生きている現代の重大事故。この「千年」とは、まだ半減期の途中なのでしょうか。コトバンクによると、「半減期」は「放射性元素が崩壊して、その原子の個数が半分に減少するまでの時間」は、元素によつとそれぞれ違い、例えば「ウラン238」では45億年、かかるのだそうです。

「メルトダウン」から千年たった地球には、眩しいほどの「菜の花」が咲き広がっています。どこまでもどこまでも、在るのは「菜の花」ばかり。この世のものとは思えない「菜の花」の黄色を美しく眺めているうちには、ハッと気づくのです。「千年前」の「菜の花」つてこんなに激しい黄色だったか……と。よくよく近づいてみると、眼前の「菜の花」の二花二花の大きさに驚きます。「菜の花」の一本一本は、まるで蓮の葉のようにゆらりゆらりと風に戦っているではないか……。そんな想像に囚われて、慄然としました。「メルトダウン」千年後の未来、そこに咲く「菜の花」を皆さんはどう想像しますか。

地

菜の花を黄色はみ出してはないか 鞠月けい

「いちめんのなのはな いちめんのなのはな」と詠ったのは詩人山村暮鳥ですが、一面の「菜の花」が風に揺れるさまを見ていると、「一花一花の「黄色」が「はみ出して」いるかのように思えてならない、というのです。「菜の花を」の「を」が巧いですね。一面に咲き広がる「菜の花」らしさを確保しつつ、「はみ出してはないか」という眩きが、詩的リアリティとなって広がります。

なのはなの黄つ黄黄つ黄と「すれあふ」 鈴木牛後

これも風の中の「なのはな」なのだと思いますが、「黄つ黄黄つ黄」が菜の花の色でありつつ、「すれあふ」様子を表現し得ていることに驚きます。目で見た印象の「黄」と

耳で聞く「キ」という音の印象が「すれあふ」という描写で統合されている。巧い工夫だと思います。

菜の花や川はまつたいらに進む 耳目

「川はまつたいらに」は、水量がゆたかになってくる春の川の描写でしょう。川辺にそって咲き広がる「菜の花」に焦点を置くと、「川」はまるで「まつたいらに」進んでいくかよう。眼球に映った様子を、こんなふうにも正直に描くことで、詩を発生させることもできるのです。

菜の花の空の大きいに立方体 ウェンスデー正人

季語「菜の花」は、一花一花を認識するというよりは、咲き広がる広さを内包しています。「菜の花」の平原を平面と考えると、その広さに対応する「空」とは、実に「大きい」なる「立方体」であるよ、という一句。立方体の底辺は黄色、上辺は空の青。鮮やかな「立方体」です。

菜の花やおくのまちのちさきみせ さな(5才)

「菜の花や」でカットが切れるのですが、眼前にあるのはやはり「菜の花」だけです。「とおくのまち」にある「ちさきみせ」のことを思い出している、その心にあるのは懐かしさでしょうか、淋しさでしょうか。平仮名ばかりで書かれた中七下五が、しみじみと思いを広げます。

以下は、さなちゃんの祖母菅茂子さんのコメントです。
●「ちさき」なんて言葉はどこで覚えたのでしょうか？「ちさいい」でもいいのよ。と言うと「ちさき」なんだそうです。／菅茂子

菜の花に緑の蕾百七こ ちむらやね(4才)

一物仕立てで作る時、季語に対する取材方法として、数えてみるのも一手です。「菜の花」の「一茎に「緑の蕾」は一体何個あるかしら？」と数えてみたのです。「百七こ」という数詞は、想像では言い切りにくい数字ですが、実際に数

えてみた強みが、一句のリアリティを支えます。

菜の花が送電線焦がしたのだ 月の道

「菜の花」の平原には「送電線」の連なる鉄塔が並んでいるのでしよう。夕日の当たる「送電線」の光景でしょうか。夕日が「送電線」を焦がしたのではなく、「菜の花」の黄色が「焦がしたのだ」と断定することで詩が生み出されます。夕日の中の「菜の花」も勿論見えてきますね。

なのはなにハレルヤハレルヤなぶらに とおと

「なのはな」の後にでてる「ハレルヤ」とは、主をほめ賛えよ、の意。キリスト教会の聖歌・賛美歌に使われる言葉です。「なのはな」の真ん中で「ハレルヤハレルヤ」と神を賛美する歌を高らかに歌う！かと思いきや、下五「なぶらに」にギョとさせられます。「なのはな」が歓喜の歌を歌う時、その茎はゆらゆら揺られて、私たちの体を打ちます。「なのはな」は英語でrape blossomsと書くのだと知った時の衝動が、鮮やかによみがえってきた一句。

菜の花やなんと明るき畜生道 葦信夫

「畜生道」とは、二つの意味があります。①「仏」六道・三悪道・十界の二。畜生の世界。悪行の結果、死後生まれ変わる畜生の世界。畜生趣。②人間として許し難い行為や生き方。③どちらの意味に解しても、それなりの読みが生まれます。死後生まれ変わってみると、悪行の因果応報で「畜生」に生まれ変わっていることに気づく。あるいは、人間として遂にここまで堕ちてきたかという感慨。「なんと明るき畜生道」という一種の開き直りが、眼前の「菜の花」をさらに明るくします。

菜の花を眼下に焼き場後にする 理酔

「焼き場」の「眼下」には「菜の花」が広がっています。親族の死でしょうか、友人の死でしょうか、はたまた堂々

と最後のお別れができない人物の死でしょうか。「菜の花」の明るさが、まだ死を受け入れがたい心に刺さります。

菜の花や存外太い骨なれど

としなり

「存外太い骨なれど」を、魚や食肉の「骨」だと解釈してもよいのですが、茶毘にふした後の遺骨ではないかと読みました。まだ熱の残る骨を眺めながら、故人の「骨」の太さを語りつつ、長く太い箸で「骨」を拾いつつ、「存外太い骨なれど」骨壺に入れようとすると、案外簡単に折れてしまうことに、再びの涙もこぼれます。

第168回 2017年5月8日週掲載

薄暑

はくしよ

《夏》初夏の、少し暑さを感じるくらいになった気候をいう。過ぎやすい時季ではあるが日中は汗ばむほどとなることもあり、涼風や木陰が欲しくなりはじめの頃。

天

黒板消す薄暑の大きストローク

トボル

兼題「薄暑」は、初夏の少し汗ばむ頃を意味する時候の季語。具体的な映像は持っていませんが、薄い暑さという字面通りの気分に、初夏の明るい日差しが重なります。時候の季語には、具体的な映像、音、匂いなどを取り合わせるのが定石です。

今回、「天」に推した一句。元中学校教員のワタクシとしては、強い実感をキャッチせざるを得ません。「黒板消す」のは日直当番でしょうか。「薄暑の大きストローク」という措辞は、小さな小学生ではなく、中学生高校生のイメージですが、教員自身ということも考えられます。

教員にとって、板書（黒板に字を書くこと）は授業を構

成する上で重要なポイントです。板書計画という言葉もあるぐらいで、一時間の授業の展開が決まると、板書計画も自ずと決まります。

（国語科として）理想的なのは、一時間終わってみると、黒板には授業の要点がきれいに整理されていること。途中で書くところが無くなって、先に書いたところを消してから書き足すなんてのは、板書計画を持たずに授業を展開してしまう時なんです（かつての生徒のみんな、ごめん）。

この句を読んだ時、教員自身が消しているのかもしれない、と思つたのは、そんな個人的体験からの読み。あら、書くところが無くなっちゃった！と慌てて「黒板」を消している、かつての私を思い、また思い通りの展開で板書計画もバツチりいけた授業の満足感を抱きつつ、自分で黒板を消すある日の私を思い、懐かしい感慨にひたりました。

「薄暑」の少し汗ばむ感じを、「黒板消す」という行為と「大きストローク」という比喩で描く。初夏のひかりに舞うチョークの粉、鼻に入ってくるチョークの粒子、匂い、ぐいぐいと消す黒板消しの感触、次の授業のために教室移動する生徒たちの声、自分で黒板を消しながら「体育の授業に遅れないように移動しなさいよ！」なんて生徒たちの声を掛ける教師、そんなものが一気に立ち上がってきた一句でした。

地

大学に我が影のある薄暑かな

井上じろ

「薄暑」といえば、ちょうどゴールデンウィークを過ぎ、立夏を迎える頃。「大学に我が影のある」は、若々しい大学生というよりは、大人の感慨を含んだ措辞と読むべきではないでしょうか。かつて通っていた「大学」に「我が影」がある。「薄暑」の眩しさが、かつての己の青春を思い出させているのかもしれない。

沈黙五分薄暑の生徒指導室

このはる紗耶

これも学校ですが、「生徒指導室」の一語は、中学校高

校を想像させます。「沈黙五分」という時間は、生徒の言葉を待つ先生の思い。「薄暑」の光が、「生徒相談室」の窓を明るく満たします。

千枚の窓洗い終え街薄暑

霞山旅

「千枚の窓」ですから、いくつかのビルの窓を洗う仕事なのでしょう。「洗い終え」という達成感が、下五「街薄暑」の光景を際立っています。「千枚」という数詞は、多いことの意味。「百枚」では「ビル薄暑」程度。「街薄暑」になります。

水ぶきの廊下匂へる薄暑の日

しろ

下五「〆の日」という使い方はちょっと気になりますが、なるほど、こんな匂いでも「薄暑」を表現できるのだ、と納得しました。「水ぶきの廊下」は毎日拭きあげてきた独特の艶。「水ぶき」の廊下ならではの匂いを知っている人にとっては、実感の一句です。

身ごもりて薄暑の海の漂色

三重丸

「薄暑」とはいえ、妊娠した体には堪えます。「身ごもりて」いる人物の向こうに広がる「薄暑の海」のひかりは、なんと美しいでしょう。「漂色」という青は、まさに「薄暑の海」の色に違いありません。

薄暑光会釈してさて誰かしら

あつむら恵女

「薄暑」自体が比較的新しい季語ですが、そこから派生した傍題が「薄暑光」。(歳時記によつては、これを傍題としてないものもあるようです。)初夏の明るい「薄暑光」は、逆光でしょうか。どなたか「会釈」をして下さった方がいらしたのだけれど、「さて誰かしら」という眩き。「薄暑」の日傘をさしていたのかもしれないと、想像も膨らみます。

薄暑光封じ冷めゆく吹きガラス たんじえりん金子

同じく「薄暑光」の一句ですが、描かれた光景が美しいですね。「薄暑光」を「封じ」とは何か? 「冷めゆく」とはどういう状況か? と思いきや「吹きガラス」という映像がでてくる。「吹きガラス」の光、色、工房の熱気、そして吹いている人の汗。さまざまな映像が一気に立ち上がってきます。

九龍のもの売る匂ひ夜の薄暑

久我恒子

「九龍」は中国の地名です。ネット辞書には、以下のよな解説。【香港特別行政区領内に位置する市街地の一地域名を指す。1860年に締結された北京条約において、当時の中国の政権であった清国からイギリスに割譲された地域。】

中国の「薄暑」に充滿しているのは「もの売る匂ひ」です。中国を旅すると屋台で売っているものは食べないようになり、とツアーコンダクターに注意されます。日本人はすぐ腹を壊すから、と。美味そうな、でもなんだか妖しい色と匂いの食べ物、「九龍」の「夜の薄暑」を満たします。

狸穴のテラーに行く薄暑かな

ラーラ

これも地名です。「狸穴」は、東京の麻布の地名です。「狸の穴と書き「まみあな」と読む固有名詞が、「テラー」ハスーツなど紳士服の仕立て屋という言葉と取り合わせられる楽しさ。「に行く」ですから、仕立て上がったジャケットを受け取りに行くのでしょうか。「薄暑」の狸穴坂をのぼっていく人物を想像。きつと夏のお洒落な麻のジャケットじゃないかしら、と妄想。

名画座に「昼顔」観ていたる薄暑

小川めぐる@チーム天地夢遙

「名画座」も固有名詞。全国各地の映画館に、この名をつけているところも多かったのではないのでしょうか。最近

は邦画でも「昼顔」という映画が公開されているようですが、「名画座」で「昼顔」といえばカトリヌ・ドヌーヴに違いありません。以下、ネット辞書の解説。【美しい若妻のセヴリーヌ(カトリヌ・ドヌーヴ)は、医師である夫のピエール(ジャン・ソレル)とともにパリで幸せな生活を送っていた。その一方、マゾヒスティックな空想に取り付かれてもいた。ある日セヴリーヌは友人から、上流階級の婦人たちが客を取る売春宿の話聞き、迷った後に「昼顔」という名前で娼婦として働くようになる。】

こんなストーリーの映画を「観ていたる」という時間経過、そして外に出ての「薄暑」の眩しさと汗ばむ心。嗚呼、カトリヌ・ドヌーヴ綺麗だったよなあ。

ソノシートのぐわんと間延びする薄暑

マーペー

角川書店編『図説俳句大歳時記』(昭和39年刊) 全五巻には、付録として「ソノシート」が付いています。春の巻についているソノシートを聴く機会が、一度だけありました。赤い半透明の「ソノシート」からは、さまざまな囁りが聞こえてきました。

「ソノシート」という言葉自体がすでに懐かしいものとなっている昨今。「ソノシート」が熱かなんで劣化し、のびてしまったのでしょうか。「ぐわんと間延びする」という措辞に、懐かしい実感があります。半透明の「ソノシート」の色や「間延び」した音が、美しいだけではない「薄暑」の一面と響き合います。

第169回 2017年5月22日掲載

青芝

《夏》冬の間につっかり枯れてしまっていた芝生が、春になると色を変えはじめ、夏には勢いよく伸びて一面の緑となる。

天

青芝に天使の痛覚のはなし

Y雨日

奇妙な句なのですが、一度気になりだしたら逃れられなくなりました。季語「青芝」を描くために、触覚から迫っていく方法は誰も思いつきませんが、まさか「天使」の触覚に発想が及ぶとは驚きました。

目の前にあるのは、柔らかな「青芝」です。一人ではなく、二人かそれ以上の人物が「青芝」に座っているのでしょうか。なぜそんな話題になったのかはわかりませんが、「天使」に「痛覚」があるのかないのかについて語り合っているのです。

天から「天使」が落ちてしまった時、生きていられるのか? 「天使」って生身の体は持っていない、魂みたいなものじゃないのかな? じゃあこの「青芝」の上に墜落しても痛くない? うーん、どうだろう……。

映画『シティ・オブ・エンジェル』で、女性外科医(メグ・ライアン)と恋に落ちてしまふ、「死を告げる天使セス」を演じていたのは、ニコラス・ケイジでした。生身の体を手に入れる人間になるために、天使セスは、ビルの上だっただかなんだったか、高いところから飛び下りるのだったと記憶しています。

「天使の痛覚」は「青芝」の柔らかさを思わせ、その手触りを想起させることによって「天使の痛覚」という詩語が魅力を持ち始めます。下五を「はなし」の一語(平仮名の表記)でさらりとおさめているあたりも、言葉のバランス感覚のよろしさ。次に「青芝」の上に座るときは、わたしも「天使」について考えてみようと思います。

地

ユニホーム青芝つけしまま交換

鯉太郎

試合が終わった後、お互いの健闘を讃え「ユニホーム」を「交換」している場面でしょう。ラグビーでしょうかサッカーでしょうか。「青芝つけしまま交換」という切り取り

方によって臨場感が生まれました。「青芝」という言葉が置かれた位置も巧いですね。

青芝に腹這いファウルを待つ GONZA

激しい接触プレー。「腹這い」のまま「ファウルの笛」が鳴るのを「待つ」という場面を見事に切り取りました。「腹這い」の一語によって「ファウル」をされた方の視点から描いていると分かります。審判にアピールするための「腹這い」でもあるのでしょうか。「ファウルの笛」が鳴ると、ゆっくりと立ち上がり、コーナーキックに向かう選手の姿も見えてきました。

青芝やフィールドの投擲の光り 紅の子

スポーツが続きます。「青芝」「フィールド」によって場所が描かれますが、後半「投擲」で映像がさらに明確になります。ハンマー投げを想像したのは、最後の一語「光り」の効果でしょうか。グルグル回ってから、エイヤツ！と放つ「光り」の軌跡が「青芝」の広がりを印象付けます。

青芝や廻りて匂ふさかあがり しゃれこうべの妻

これもある意味スポーツか。「青芝や」でカットが切れてからの「廻りて匂ふ」という展開に工夫があります。「廻りて匂ふ」って何が？と思ったとたんに「さかあがり」という一語が出現。「匂ふ」実感を読者として追体験させてくれた一句です。

青芝は何故だか雨を甘くする カリメロ

「何故だか」なんてのは、緩くて甘い言い回しなのですが、こんなふうに使われると、「青芝」に降る「雨」をともに味わっているかのような気持ちにさせられます。「雨」によって鮮やかになる「青芝」の色もまた甘やかなものに感じられます。

青芝に沈むラヂオのダウ平均 かもん丸茶

「青芝に沈む」という描写の後にてでくる「ラヂオ」は、小さなトランジスタラヂオでしょう。「青芝」のような場所に「ラヂオ」を持つてきているということは、音楽を楽しみたい人なのでしょうか、いつも聴いている俳句番組を聴き逃したくないのか(笑)。いま流れているのは「ダウ平均」だけど、もうすぐお目当ての番組が始まるという場面か。いやいやひよつとすると「ダウ平均」の数字に「喜」憂している人かもしれないぞ。さまざまなたちの憩う「青芝」でのささやかな「コマ」。

売られたる青芝空が立方体 たんじえりん金子

「売られたる青芝」とは、売家となっている庭の「青芝」だと読みました。さぞ丁寧に手入れをしてきたに違いない見事な「青芝」のお庭。それが売りに出されているのです。「青芝」の上にある「空」は、その庭のカタチに切り取られた「立方体」。その空の青さも残像として印象的です。

青芝や観光船の笛低し ちびつばさう

「青芝や」でカットが切れて、次に出てくるのが「観光船」という展開がいいですね。避暑地の湖でしょうか、東京の隅田川かもしれないし、大阪ならば堂島川、土佐堀川、大川なども「観光船」が行きかっています。作者の立っているのは船着き場に続く「青芝」の公園。「観光船の笛低し」という措辞によって、広々とした川面の遠近感が描かれます。特に「低し」という描写の効果を誉めたい作品です。

ぐんぐんぐんぐん青芝迫るパラシュート めいおう星

おぉ、こんな発想もありましたか！「ぐんぐんぐんぐん」というオノマトペの迫力。それが「青芝迫る」様子だと分かった瞬間のスピード感。平面を「青芝」に向かって走っていく「ぐんぐんぐんぐん」とかと思いきや、最後の「語」パラシュート」で、それが垂直軸であることが分かる

迫力。着地した瞬間の「青芝」の感触も体感させてもらいました。いつか「パラシュート」やってみたくなりました！

夏目君発ツ夏芝ノ英国へ このはる紗耶

兼題「青芝」の傍題に「夏芝」があります。「青」という色や柔らかさが印象的な「青芝」に対して、「夏芝」は夏という季節になってグングンツンツン育つ芝のイメージです。「青芝」ではなく敢えて「夏芝」を選ぶにはそれなりの必然性というヤツが必要ですが、なかなかの技ありの一句。「夏目君」の「夏」との文字合わせ。「英国」という堅い伝統を思わせる国の「夏芝」の印象。夏目漱石の留学の場面をこんな形で表現しつつ、彼が「英国」の「夏芝」に立っている姿も想像させる。見事な企みを堪能させてくれた作品です。

第170回 2017年6月5日掲載

ぼうしゅ 芒種

《夏》二十四節気の一つ。太陽の黄経が75度に達した時で、陽暦では6月上旬頃。稲や麦など芒のある穀物の種を蒔く時期を指し、田植えが始まる日である。

天

芒種なり秘詞を次郎に口伝して 谷口詠美

「芒種」とは「芒」(イネ科植物の果実を包む穎すなわち稲でいう籾殻にあるとげのような突起)を持った植物の種をまくころ。田植えの前の作業の一つ「種蒔き」は稲のみを苗代にまく作業をするのが「芒種」です。二十四節気の一つ「芒種」は、田の神さまを招く神事とも関係している季語。それを上五「芒種なり」と断定するところから一句が始まります。

「秘詞」とは、田の神を迎えるための祝詞だろうと思います。代々親から子へ伝えられる、「口伝」される「秘詞」を、

今年「次郎」に伝えているというのです。「次郎」は次男の名。では、一家の跡継ぎであるはずの太郎はどうしたのでしょうか。病気で亡くなったか、農業を嫌がって別の仕事についたか。はたまた出奔したか、女と駆け落ちしたか。そんな一家の物語が様々に想像されてなりません。

地

暗渠よりどろどろ吐かるる水芒種 たんじえりん金子

田植えが近づくと村中の水路に水が走り出します。田に水を張るための水です。「暗渠」から「どろどろ吐かるる」という描写に臨場感があり、「水」「芒種」と畳みかける着地も、内容に似合います。

あざやかな芒種の雨とおつしやられ 井上じろ

「あざやかな芒種の雨」とは、田植えを前にしての待望の雨であり、田を満たすための水を喜ぶ心でもあります。例えば「あざやかな芒種の雨でありにけり」では、そのまま過ぎて「あざやかな」という美辞が浮きますが、下五「とおつしやられ」と敬語で表現される人物の存在が匂うと、「あざやかな」が俄然、みやびな言葉として味わいを深めます。

顛顛を絞る芒種の鉄の箍 クズウジュンイチ

まずは言葉の意味を確認しましょう。「箍」とは、「桶や樽などの周囲にはめ、その胴が分解しないように押さえつけてある、金属や竹で作った輪」「顛顛を絞る」は肉体的痛みの比喻ですが、その「絞る」モノが「鉄の箍」だということです。比喻を重ねながらも破綻してないのがさすがです。

「芒種」の頃の肉体的変調を述べている句ではあるのですが、「顛顛」の痛みを想像しているうちに、まるで己が耕馬になって「鉄の箍」めいた轡をはめられているような気持ちになってしまいました。これも「天」に推したかった作品です。

芒種なり仏の飯はすぐ乾く

うに子

「仏の飯はすぐ乾く」はいくらでもあるフレーズですが、上五「芒種なり」と言い切ることで、この時期の忙しげな農家の仏間が見えてきます。田植えまでの準備の日々。朝炊いて、お供えした「仏の飯」はあつという間に乾き始めます。静かな仏間から、明るい農家の庭も見えます。「芒種」の種蒔きの作業も始まっています。

しゃくしゃくと芒種の空に冷や茶漬け 六々庵

「しゃくしゃく」というオノマトベが、「冷や茶漬け」を食べる音だと分かった時の、食欲という快感。なんとも美味そうな音です。「芒種の空に」という措辞が、忙しい農作業の間にかつ込む臨場感を醸し出します。同じご飯でも、「仏の飯」とは全く違う健康的な飯です。

芒種病んで無眼の百足産み落とす

ウロ

芒のある植物の種を蒔く時期「芒種」が、無数の脚を持つ「百足」も産み落とされているという発想にハッとします。「芒種病んで」という上五の展開に驚きつつ、「無眼の百足」という詩語の恐ろしさに鳥肌が立ちます。

アポロンのくるぶしを刺す芒種の草

ウエンズデー正人

「芒種」は田の神様を迎える頃ですから、どうしても日本的発想になるのですが、神様つながりで「アポロン」を連想した点にオリジナリティがあります。「アポロン」とは、ゼウスの子で「音楽・詩歌・弓術・予言・医療・家畜の神。フォイボス（光り輝く者、意）とも呼ばれる」神です。「芒種の草」は「アポロンのくるぶしを刺す」勢いでぐんぐん伸びています。「芒種」の雑草に着目した視点も、ひと味違う一句でした。

首謀者のゴーシュ芒種を忘じをり

直木葉子@早口言葉で一句

「首謀者」「ゴーシュ」「芒種」「忘じ」と並べた言葉遊びでありつつ、「首謀者のゴーシュ」が何かの企みに気を取られて、芒のある植物の種を蒔くことを忘れていた、と読めば、意味としても十分成立します。愉しませてもらった一句♪

第171回 2017年6月19日週掲載

白靴

《夏》涼しさの演出として、夏になると足元も白い靴が好まれるようになる。昔は、男性が夏に白い革靴を履くことが一般的だったが、汚れやすいこともあり現在では履く人が減った。

天

白靴や割りて南国なる果実

福花

「白靴」の本意とは、涼しさを演出するためのお洒落。白い革靴をタンデューに履きこなす、大人のお洒落です。女性らしい白靴もあってよいかと思いますが、あくまでも涼しさを表現するファッションとして詠んで欲しい季語ですから、結婚式などのセレモニーの白い靴、自衛官・音楽隊員・看護師など職業的白靴、スポーツや学校現場での白い運動靴も、季節感として疑問が残ります。勿論、そこに涼し気なお洒落感がうまく表現されている可能性もありますので、全否定はしません。あくまでもケースバイケースです。

さて、そんな兼題「白靴」ですが、明るい夏の太陽に満ちたこの作品に惹かれました。「白靴や」と強調したあとに現れるのが「割りて」という謎の行為。一体何を割った？と思った瞬間、「南国なる果実」が鮮やかに登場します。

お洒落な「白靴」を履いての海外旅行か。現地の太陽に育まれた「南国の果実」を「割りて」という心楽しい場面。「南国の果実」の鮮やかな色合い（個人的にはオレンジ色を想像）に加え、「果実」の芳香が一気に溢れます。

これらの鑑賞をうまく導き出しているのが「割りて」という措辞。「果実」を割る瞬間を見事にバックイングして、「果実」の色、豊かな果汁、芳しい香りを想像させる見事な誘導です。語順も絶妙。まるでこの句の現場に立ち合っているかのような臨場感に、拍手を贈りたい作品です。

地

白靴や星の高さのプールバー

24516

「プールバー」とは、ビリヤードの設備があるバーです。いかにも大人の遊びっぽいビリヤード。しかも「星の高さの〜」ですから、高層ホテルのラウンジでしょうか。大人たちの夜の「白靴」もまた、この季語の持つ世界です。「星の高さのプールバー」という詩語がいかにもお洒落な一句です。

娘もらいに白靴のなんて大きい

プリマス妙

「娘もらいに」行くわけですから、夏らしい清涼感あふれる、だからといって華美にはならぬ、そんな恰好で我が家に戻ってきた男です。その仕上げがお洒落な「白靴」なんだけど、「なんて大きい」という率直な台詞に、思わずクスリ。その大きさが、遅しくもあり、ずうずうしくも感じるのが、親心つてヤツなんでしょうねえ（笑）。

白靴は知らない戦争も知らない

b e

かつて「白靴」は大人の男のお洒落でありました。麻のブーツに白い革靴。粋なおじさんたちが闊歩していた時代は、確かに「戦争」前後の時代と重なります。「知らないく知らない」というフレーズが、今を生きる若者の主張でもあるかのよう。

白靴の我ら無敵や夜を占むる

阿武玲

「白靴の我ら無敵や」と言い放つのは、お洒落な「白靴」を鎧として「夜」を闊歩する男たち。「無敵や」と強調される彼らの高揚を「夜を占むる」という下五が受け止めます。懐古的な意味をこめて銀座を思うか、大人の遊びを思わせる赤坂や神楽坂、はたまた歌舞伎町のスレた「白靴」を思うか。さまざまな街の「夜」が読者の脳裏に浮かんで消えていきます。

白靴の踵ささくれハイボール

さとう菓子

「白靴」がなぜお洒落かという点、こまめに手入れをしないとすぐに、崩れた感じになってしまうから。「白靴」の持つマイナス面もまた、季語の持つ世界です。「ささくれ」ているのは「白靴の踵」だけではないのでしょうか。心のささくれ、人生のささくれを炭酸の泡として飲み干す「ハイボール」です。

吾と誰ぞ歯医者者に並ぶ白靴は

アマンバ

治療が終わればそのまま「白靴」で出掛けようと、お洒落ないでたちで訪れた「歯医者」の玄関。先客の「白靴」に目がとまります。「吾と誰ぞ」という率直な疑問の台詞が「白靴」の特別感をうまく表現。治療室から出てくる人物を眺めていけば、もう一つの「白靴」の持ち主はすぐに分かるに違いありません。

辛うじて白靴であること保つ

雪つやぎ

どんなに手入れをしても「白靴」は、傷が目立ちますし、やがては変色していきます。「辛うじて」という措辞の実感と、「〜であること保つ」という観察が、季語「白靴」の「物仕立てを成立させました。読んだ人の脳裏には、ほぼ同じ程度にくたびれた「白靴」が再生されるはず。

白靴を履かせそのまま外す下肢

比々き

「白靴を履かせ」で、誰かが誰かに履かせてあげてののかと思うと、「そのまま外す」という謎の措辞が現れ、最後に「下肢」の一語で映像が確定する、見事な描写力です。似た発想の句もあったのですが、この句の持つ優れた映像喚起力に脱帽します。

白靴の詩人の向かふ砂漠かな

Mコスモ

「白靴」を履いているのがどんな人物であるのかを想像する句もたくさんありますが「砂漠」へと向かう「詩人」という設定に物語があります。下五「砂漠かな」と詠嘆したこと、遙かな視界が立ち上がってくる点も誉めたい一句です。

アウシユビツツの山なす靴にしる靴も

白鳥国男

ギョツとしました。「アウシユビツツ」のガス室に入られる人たちは皆、「靴」を脱ぐよう命令され、死の部屋に押し込められていったのでしょう。「アウシユビツツの山なす靴」の中に、夏のお洒落な「しる靴」を見つけた瞬間。靴の数だけの様々な人生が虐殺という形で踏み躪られたのだ、という事実が慄然と作者を襲います。これも、「天」に推したかった、深く記憶に残る作品です。

第172回 2017年7月3日週掲載

ひやけ 日焼

《夏》夏の日光で肌が黒く焼けること。以前は健康のシンボルとされたが、近年は紫外線による悪影響を避けるため、日焼けを防ぐようになった。

天

擦れ違う日焼の群れの塩素臭

江口小春

さまざまな人物のさまざまな場所での「日焼」を描いてくれた作品の数々。楽しませていただきました。「天」に推したい句はたくさんありましたが、今回は一瞬の実感を切り取ったこの作品を！

「擦れ違う」という複合動詞は、人物と人物の短い時間の動作を描写。どんな人物と擦れ違ったのだらうと思つた瞬間、「日焼の群れ」というフレーズが出現します。作者の側は一人、向こうからやってきたのは見事に「日焼」した一団。光景が明確に再現されています。

そして、最も誉めたいのが下五。「日焼の群れ」と擦れ違う瞬間、「塩素臭」がしたという嗅覚です。体から髪から匂ってくる「塩素臭」は、長い時間プールで泳いだ人ならではの特徴。「日焼の群れ」とありますから、中学や高校の水泳部ではないかと読みました。同じ「塩素臭」を匂わせている可能性としては、オリンピック選手とかも想定できますが、彼らは立派な屋内プールで練習しているでしょうから、「日焼の群れ」という表現にはならない。プール帰りの親子の可能性も考えましたが、その賑やかな明るさに対して「日焼の群れ」という措辞はニュアンスが違いますね。

「擦れ違う」という時間を切り取りつつ、「日焼の群れ」という人物たちをリアルに想像させる言葉の選択。さらに、その「日焼の群れ」が発する「塩素臭」を瞬間的にキャッチする嗅覚。俳人らしい鋭敏なアンテナが、日常の何気ない出来事を見事に切り取りました。

地

なりはひは明らかならず日焼の背

クズウジユンイチ

上半身を脱いでいる人物に出会ったのは、浜辺でしょうか、公園でしょうか。「日焼の背」の日焼け方が尋常では

ないのでしよう。「なりはひ」とは、生計を立てていくための仕事。この日焼け具合は、一体どんな仕事をしている人のだろうという疑問が心を過ぎるほどの「日焼の背」が見えてきます。

日焼とも翅を挽がれし痛みとも

とおと

「日焼」の痛みも侮れません。日焼けと火傷は紙一重。その痛みを「翅を挽がれし痛み」とイコールで並べる発想が面白い一句です。まるで自分が蝶になつたかのように、「日焼」の痛みを感じとれるのが作者独自の感性。「くともくとも」という型を選んだことも、この発想をうまく表現し得た要因の一つでしょう。

島の子も旅の子も日焼けかゆいかゆい

ぐわ

「日焼」は痛いだけではありません。「かゆいかゆい」もリアルな症状。「旅の子」だけではなく、夏の太陽に慣れつこの「島の子」だって、「日焼」の痒みは同じ。下五字余りにした「かゆいかゆい」が可愛くも情けなくて、面白作品です。

配球にまだ額かぬ日焼の眼

かま猫

「日焼」というと甲子園を思い浮かべた人たちも多いようです。「配球」という一語の持つ言葉の経済効率。「配球にまだ額かぬ」というフレーズによって、野球のバッテリー間のやり取りが続いている様子がありありと伝わります。下五「日焼の眼」と焦点を絞った点も巧い。勝負の「眼」の迫力を活写しています。

日焼子がエラーのグラブ叩く叩く

隣安

これも甲子園でしょう。「日焼子」の動作を中七下五で描写しました。「エラー」という場面、「グラブ」を悔しくて「叩く」という動作が、見事に切り取られています。下五「叩く叩く」のリフレインが、映像と共に、選手の表情まで想像させます。

日焼子の眼へ照り返すチューバ

樫の木

こちらは応援団席ですね。プラスチックバンドの一団の中、光を放っているのが金ぴかの「チューバ」。前半の「日焼子の眼へ」と焦点を絞り、「眼へ」何が思わせておいて、「照り返すチューバ」と描写する。順の効果を熟知しての二句、さすがです。

日焼して二言めには波のこと

かるかるか

「日焼して」という状況からの展開が、軽くもあり気急くもあり。「二言めには波のこと」しか言わないのは、波だけを見つめる海の休暇を心から楽しんでるのか。はたま「波のこと」しか言えない恋人同士のはにかみの時間なのか。様々な人物が浮かんで消えていく、夏の午後。

角笛を空へ日焼の象使い

かまど

メルヘンの「日焼」も一句いただきました。「角笛」を「空へ」向かって吹いているのが「象使い」であるという光景はまるで絵本の世界のように。いやいや、ひよつとすると現地どころな「象使い」を見たのかもしれないが、一句の味わいとしては季語「日焼」の楽しさを別の角度からみせてくれた作品として心に残りました。

予備校にそれは見事な日焼の子

トポル

どんな場所で「日焼」の人物に出会っているのか、と発想することも有効です。「予備校」の一語で、場面を確定させ、「それは見事な日焼の子」を登場させる楽しさ。余裕しゃくしゃくの「日焼」か、すでに捨て鉢な「日焼」か。想像がさまざまに膨らみます。

そんなこと日焼の顔で言われても

耳目

これは会社かな。悠々と夏季休暇を海外で楽しんだ上司が、ハワイ土産かなんかを部下に配った後で、「君、この資

料はなんだ!?」なんて言い出したのでしよう。自分は休暇を楽しんでたくせに、「そんなこと日焼の顔で言われても」納得できない!と心のなかで呟く。そんな場面を想像して、笑えました。

証人の日焼がどうも嘘つばい

初蒸気

まさか「日焼」で裁判所が出てくるとは思わなかった(笑)。俺はね、ずっと野外で仕事しているから、あの日その男が不審な行動をとっていたのをこの目で見たんだよ!なんて、証言しているのでしょうか。裁判員裁判の法廷にかり出された一般人の呟きか、と読みました。「証人の日焼」は、日焼サロンで無理やり焼いたみたいない「日焼」に見えるけど……なんて、疑っているのか。

同時投句には「おばあさんは川で洗濯した日焼」も相変わらずの自在な発想。初蒸気ワールド、楽しませてもらいました。

第173回 2017年7月17日週掲載

しゅうおうしき 秋櫻子忌

《夏》7月17日。水原秋櫻子の忌日。「紫陽花忌」「喜雨亭忌」「群青忌」とも呼ばれる。明治25年(1892年)10月9日に東京神田で生まれ、昭和56年(1981年)この日に、88歳で亡くなった。

天

白樺のあまぎ樹液や群青忌

比々き

本来であれば傍題ではなく、ズバリ「秋櫻子忌」の句を「天」に推したいところなのですが、「紫陽花忌」「喜雨亭忌」「群青忌」など、魅力的な傍題も捨て難い今週。この句を推させて下さい!

秋櫻子の「白樺」の句といえば、「白樺に月照りつつも

馬柵の霧」「白樺を幽かに霧のゆく音か」などが思い浮かびます。「白樺」という素材は、まさに印象派のような明るさ。「啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々」に代表される秋桜子らしい世界です。「白樺」の「樹液」なんて舐めたことではないのですが、「あまぎ」の味覚を読み手それぞれが追体験し、「くや」という強調を味わいます。

「白樺のあまぎ樹液や」というフレーズに対して、仮に「秋櫻子忌」をもつてくると、「秋桜」という植物を思わせる文字面が「白樺」と相殺。「紫陽花忌」も同じです。「喜雨亭忌」だと「喜雨」が微妙な因果関係を匂わせませす。「群青忌」は、「白樺」との色の印象が美しく、さらに秋桜子作「瀧落ちて群青世界とどろけり」の世界も同時に立ち上がります。「白樺」の林の向こうにあるに違いない溪谷や「瀧」が想像されて、涼やか。うっとりとした素敵な句。

以下は、作者の体験です。

●10年ほど前の夏、貸自転車で1泊2日かけて秩父を回ったことがあります。その貸自転車屋さんのお店で売っていたのが「白樺のジュース」。白樺に疵をつけて染み出してくる樹液を集めたもので、その樹液を採ったという白樺も庭先にあり、今年採つたら来年は休ませないと枯れてしまうとも言っていました。珍しいものには目がありません。早速買って飲んで見ましたが、爽やかに甘かったのを覚えています。／比々き

地

あをかきに万葉のいろ喜雨亭忌

永井潤一郎

「あをかき」は「青垣」、青々とした山々が周りを取り囲む様子を青い垣に見立てた言葉です。その土地を言祝ぐ言葉でもあります。

秋櫻子は万葉調と呼ばれる調べを俳句に取り込んだ人でもあります。周囲の青い山々は「万葉のいろ」であるよ、折しも(秋櫻子の亡くなった)喜雨亭忌でもあるよという一句は、秋櫻子への尊敬、倭の国への言祝ぎを詠っているのです。「喜雨」の印象が、山々の青をますます美しくするかのよう印象も。

書架922-3 箔押し金よ秋櫻子忌 としなり

こんな体験もそのまま一句になるのだなあと、感心。「書架922-3」に数詞のリアリティがあります。中七「箔押し金よ」という色と詠嘆が、「秋桜」という文字を含む季語「秋櫻子忌」と、つかず離れずのイメージを構成しています。以下も、作者の体験です。

●歴史ある大学図書館を利用して頂いている。秋櫻子と検索すると二画面に収まりきれない蔵書がヒットした。表示された本棚へ進むと、背表紙に水原秋櫻子の金文字が並んでいた。／としなり

師系てふみづ溢れたり紫陽花忌

夜市

秋櫻子は、虚子のもとで四Sと呼ばれる高弟でしたが、次第に虚子の主張に違和感を持ち始め「師系」から離脱します。「てふ」は「ちよう」と読んで、「く」という意味。「師系」から溢れ出た「みづ」は新しい師系を作ります。「紫陽花」の一語を含む「紫陽花忌」という季語が、瑞々しい印象を醸し出します。

群青忌大河は時を急がざり

とおと

「瀧落ちて群青世界とどろけり」から生まれた傍題「群青忌」を、象徴的に表現。瀧を落ちていった水は、やがて「大河」となります。「大河」は「時」を急ぐことなく、ゆったりと流れ、大きな時流を作っていきます。水原秋櫻子という俳人の業績を思わせる、悠々たる一句です。

産道はひかりへ続く喜雨亭忌

鞠月けい

産婦人科医であった秋櫻子からの発想です。「産道はひかりへ続く」というフレーズは、赤ん坊が生まれてくることへの賛歌でありつつ、比喩的な意味も含んでいます。「喜雨」という言葉を含む季語「喜雨亭忌」は、命をつなぐイメージをうまく表現しています。

胎脂ぬぐう秋桜子忌の夜明け前

かみつれ

産科の現場を詠んだ句も沢山ありましたが、「胎脂ぬぐう」のリアリティにハッとします。まさに産婦人科医の日常の行為。下五「夜明け前」という時間にも臨場感があります。この句の場合は、他の傍題ではダメですね。「秋桜子」という人物がストレートに想像されてこそその一句です。

振れたる黒き臍の緒群青忌

豊田すばる

「臍の緒」を入れた小さな桐箱でしょうか（イマドキは、そんなものに入れないのかな。乾ききって「黒」く「振れている我が子の「臍の緒」に、「群青」の一語を含む季語「群青忌」が鮮やかな印象を添えます。

クレゾール匂ふ長椅子紫陽花忌

トボル

秋桜子の働く現場は「クレゾール」の匂いも親しいものとしてあったに違いありません。「クレゾール匂ふ長椅子」は待合室でしょうか。季語「紫陽花忌」に含まれる「紫陽花」の一語、秋桜子を慕いつつ、雨に揺れているのかもしれない、受付窓口に飾られているのかもしれない。

喜雨亭忌やもりのつらさ少し濡れ

ごぼり

忌日の季語は、季節感というよりは連想力を核としていますので、別の季語と取り合わせても、あまり違和感はありません。「喜雨」の一語を含んだ「喜雨亭忌」は飄々とした味わい。雨を喜び、書物に没頭する秋桜子も、こんな光景と出会っていたかもしれない。「やもりのつらさ」という表現、「少し濡れ」という描写。地味ですが味のある一句です。

光漲る秋桜子忌の野球場

檜の木

野球好きだった秋桜子。「ナイター」の光芒大河へだてけりから「ナイター」という夏の季語が生まれました。これも、他の傍題では成立しないタイプの一句。「秋桜子忌」

を中七に入れてくるのも、技あり！です。

秋桜子忌のネップモイ乾して星

ウエンズデー正人

秋桜子はお酒はほとんど飲みませんが、酒ネタの句は案外ありました。「ネップモイ」とは、ベトナムの焼酎。意外な取り合わせに味わいがあります。

「秋桜子忌」は、秋桜子という人物が全面に立つ季語。秋桜子の忌日は7月17日。ベトナムの酒を飲み「乾して見上げる」星。気が付けば、そうか今日は「秋桜子忌」だったか、という感慨。秋桜子は酒を飲まなかったらしいなと思いつつ飲む「ネップモイ」の豊かな香ばしさと甘い香り。「白樺のあまき樹液」も「ネップモイ」も、その甘やかな豊かさが「秋桜子」に似合うのかもしれない。

第174回 2017年7月31日週掲載

夏越

《夏》陰暦6月晦日に行われる大祓の神事。夏越の祓。「輪越祭」とも呼ばれ、参詣者が茅の輪をくぐったり、形代に穢れを託して祓い流したりするなど神事が行われる。

天

水かけて白飯うまき夏越かな

剣持すな恵

陰暦六月晦日最後の日に行われる大祓の神事が「夏越」です。六月と十二月の晦日は、それぞれ春と夏、秋と冬が入れ替わる物忌み（不吉であるとして物事を忌み避けること）の日とされてきました。半年の罪や穢れを祓い、残り半年の無病息災を祈願するために、人々は「夏越」の神事に集うのです。そんな神事の時期の実感を、こんな日常的コマを切り取ることで表現できるのかと愉快になりました。夏の暑い時期、炊き立ての「白飯」に「水」をかけて食べるがあります。「水飯」という季語もあるくらいです。

「水かけて白飯うまき」という措辞は、「水飯」という季語をそのまま書いているようなものなのですが、下五に「夏越」という季語が出現したとたん、一句の世界が鮮やかに立ち上がります。

「夏越」の頃の暑さはひとしきりで、食欲も落ちがち。「水」をかけてかき込む「白飯」の美味しさに、生きている実感が漲ります。「夏越」の神事に行く前の腹ごしらえでしょうか。「夏越」にて身の穢れを落とした後の昼ごはんでしょうか。「水」の涼やかさ、「白飯」の白の美しさが「夏越かな」という清々しいの祓いの場への詠嘆を豊かに支えます。

地

夏越の水雲取山に発す水

山香ばし

「夏越」の神事に使う水でしょうか、「夏越」の境内に涼やかな水音を立てる竜頭水でしょうか。この「夏越の水」は「雲取山」から出るばると流れてくる「水」であるよという一句。この山がどこにあるのかは知りませんが、雲を取るかのように高い山と呼ばれているに違いありません。「雲取山」に降る雨が美しい伏流水となり川となり、そして今「夏越の水」となって、人々を清めているのです。これも「天」に推したい秀句でした。

夏越かなごひきのりゅうがみずをはく

ちま(3さい)

「夏越かな」という上五の詠嘆から、平仮名ばかりでつづられた「ごひきのりゅうがみずをはく」という措辞が、映像を切り取ります。大きな神社の大きな手水場か。「ごひきのりゅう」が吐いている「みず」の音、ひんやりとした冷たさ、青銅製の「りゅう」たちの凜々しい顔つきまでが想像できました。

同時投句「夏越かなてんぐのはなにとりがにわ」も実に可愛い。うちの子たちが大好きだった『てんぐさん』とだるまちゃん』の絵本を思い出しました。

もつちりと夏越の菓子透けにけり

時雨

「夏越の菓子」とは、水無月のことですね。白い外郎の生地（し）に小豆を敷き詰め、三角形に切ったお菓子です。小豆は悪魔払い、三角は暑氣払いの水を模しているのだそうです。「もつちりと」がいかにも外郎らしい感触。「透けにけり」もシンプルな措辞で、「夏越」らしさを表現しています。実感のある上品さがいいですね。

心宿ばうばう脈打てる夏越

土井デボン探花

「心宿」は、「中子星」とも書き、「なかごぼし」と読むのだそうです。辞書には「二十八宿の心宿の和名」という解説があります。「二十八宿」の意味が分からないので、さらに辞書を引いていくと「黄道に沿う天空の部分に設けた二八の中国の星座。その起源は諸説があつて定かではないが、紀元前数世紀にさかのぼるものとされている。各宿にはそれぞれ規準の星（距星）があるが、各宿の間隔は等分にはなっていない。太陰（月）がおよそ一日に一宿ずつ宿るところと考えられた」というマニアックな解説。さらにあれこれ調べていくと、蠍座のアンタレスほか二星が「心宿」にあたるのだそうです。

アンタレスたちが「ばうばう」と脈打っている「夏越」でありますよ、という一句なのです。心宿」という字面の連想力が、「脈打つ」という措辞をつなぎとして、「夏越」という季語の世界を際立てます。赤い夏がここにあります。

船で行く社なりけり夏越

松尾千波矢@チーム天地夢遙

「夏越」の傍題「夏越」です。「船で行く社なりけり」という状況がなんとも涼し気。「なりけり」の言い切りも気持ちが良いです。水の匂い、風の感触も伝わります。「夏越」に向かう船上には、明るい高揚感も広がっているのでしょうか。

膝上げてくぐる茅の輪や砂利香る

魚ノ目オサム

「夏越」の傍題には「茅の輪」もあります。「膝上げて

くぐる」は、神事を行う神主の動作でしょうか。「茅の輪」をくぐる人々の様子、あるいは自分自身を詠んだのかも知れません。中七「や」の強調の後、「砂利」という足元へカットを切りかえるカメラワークが見事。さらに「香る」という感知には、神事の清々しい緊張感も読み取れます。

匂ひ立つ茅の輪の先に力石

夏柿

「力石」は、かつて力くらべに用いた石です。神社の境内や村々の辻に置いてあることがあります。この句の場合には、季語が「茅の輪」ですから、境内の「力石」ですね。「匂ひ立つ」という「茅の輪」の清々しい香りを描き、その「輪の先」に置かれている「力石」を描くことで、鮮やかな遠近感を表現しています。

山靴の夫婦茅の輪を潜りけり

らくさい

「茅の輪」をくぐる人たちの様子を描いた句もたくさんありました。「山靴の夫婦」というたったこれだけの措辞で、そこにいる二人の人物をありありと描く。見事です。これから登る山の麓の神社でしょうか。登山の無事を祈りつつ、半年の穢れを祓います。映像の切り取り方が見事な一句です。

背番号順に茅の輪をくぐらせる

さるぼぼ@チーム天地夢遙

先ほどの句は「山靴」という小道具を巧く利かせていますが、こちらは「背番号」の二語が効率的に働いています。しかも「背番号順」ですから、チーム全員で参拝に来たに違いありません。「くぐらせる」という措辞から、「背番号」をつけたユニホームの子どもたちを想像。監督なりコーチなりが、「背番号順に並んで！」なんて声を張り上げている様子まで見えてきた楽しい作品です。

鯛

《秋》晩夏から初秋にかけて、カナカナカナと響きのある美しい声で鳴く鯛。早朝または夕刻に鳴くが、特に夕刻によく鳴くことからこの名がある。鳴き声から「かなかな」とも呼ばれる。

天

耳搔けば鯛の澱出るわ出るわ

堀口房水

「澱」の辞書的意味は①液体の底に沈んだかす。おどみ。②すつきりと吐き出されないで、かすのようにして積もりたまるもの」の二つです。まず思ったのは、②の意味です。「鯛」のカナカナカナカナという音の積もり積もってきた「澱」が、「耳」の奥から次々に出てくる。「出るわ出るわ」という虚の詠嘆にクスリと笑いつつも、その実感にうなずかされます。

では、①の意味はどうなんだろう？と考えると、「鯛」の林に立った時のことを思い出しました。「鯛」の林の中に立つと、まるで静かな水底にいるような心持になります。「鯛」の声という水が、我が耳を満たし、その音が水底に沈み、静かな「澱」となっているという妄想。そんな①のイメージを背後に抱きつつ、②の意味の「澱」が掻きだされたとなん、「澱」たちがカナカナカナカナと小さな音を立てるのかも!?と思うと、またまた愉快になります。「耳搔けば」には三つの意味。耳を掻いたのでという原因理由、耳を掻くときはいつもという恒常条件、耳を掻いてみるとまたまたという偶然条件。皆さんなら、どの意味で解釈しますか。私は、「耳を掻いてみると」という偶然条件で読みました。下五「出るわ出るわ」の愉快を、たまたまという気分がさらに掻き立ててくれそうです。

蝸や今何歳と山に聞く

むらさき (5w5i)

「蝸や」という強調の後につづく「今何歳と山に聞く」という童心が、どっしりと読者の心に届きます。「山」の年齢という発想を「蝸」という季語が支えます。骨太な日本昔話みたいな一句です。

蝸へ無言の雲を寄せ集む

Y 雨日

「蝸」は、いつも無垢な哀しみを抱いているように鳴きます。そんな「蝸へ」向かって、「無言の雲」が寄せ集められる。一体誰が「無言の雲」を「寄せ集む」のでしょうか。神様の優しい気まぐれかもしれません。

かなかなや無言は無音とは違ふ

大塚迷路

「蝸」の傍題が「かなかな」。二つの季語を使い分けるとすれば、「蝸」は実体に軸足があり、「かなかな」はその声に軸足が傾くということになるでしょうか。

「かなかなや」という詠嘆の後に取りあわされる二つの言葉、「無言」と「無音」。何が「違ふ」というと、「無言」には人間の意志が入ってくるということか。音がしないのが「無音」、言を発しないのが「無言」。その「無言」のはざまを「かなかな」は切々と鳴き募るのでしよう。

かなかなや反古悶えつつ火に巻かれ

めいおう星

「かなかな」の声に煽られるかのように、「反古」が燃え上がります。「悶えつつ」という擬人化は「火」に巻かれている「反古」の様子を映像として切り取ります。中七下五「悶えつつ巻かれ」という措辞は、再び上五に戻ってくるかのような印象です。同時投句「かなかなの声さらさら」と水の声」にも惹かれました。

かなかなや開かずの蔵に誰かいる

あいだほ

「開かずの蔵」という言葉そのものがホラーめいていますが、そこに「誰かいる」となれば本物のホラーになりそう。「開かずの蔵に誰かいる」気配に、「かなかな」も騒ぎ出しているのかもしれない。

蝸や実験棟に開かずの間

小泉岩魚

「開かずの蔵」があれば「開かずの間」もあるでしょうが、それが「実験棟」の一部屋だとすると、こちらは完全にミステリーです。「実験棟」という言葉の向こうにある薬品の刺激臭が、「蝸」を高ぶらせます。同時投句「かなかな好き雨降るときの匂い好き」にも共感します。

蝸や剖検室の鯉えた床

上里雅史

足を踏み入れたことはありませんが、解剖室ではなく「剖検室」という呼称や、「鯉えた床」という描写からひと昔前の様子だろうと想像しました。ホルマリンの臭いと、絶えず水を流しているであろう床とが生々しく思い浮かびます。「蝸」の叫びが次第に高くなっていくかのような一句。同時投句も「蝸や剖検台の木の枕」も見たことないけど、見たような気にさせる一句です。以下、作者の体験談です。

●近代的な最近の病院は違うのでしようけれど、ムカシの病院はこんなでした。かつて、某大学剖検部（冒險部ではない）に所属していたときの、剖検室（解剖室）は、それは凄惨な雰囲気でした。長靴なしでは歩けない床。常に濡れている木のスノコから立ち上るホルマリン臭。部屋の隅の黒い染み（カビ？）。鼻で呼吸したら、卒倒しそうなおいの空気でした。マスクして、口呼吸してました(笑)。
／上里雅史

かなかなや爺ちゃんの木が枯れました

今治・しゅんかん

「かなかな」が鳴きしきり、「爺ちゃんの木」が枯れてしまっ

た。「爺ちゃんの木」とは、爺ちゃんが愛していた木でしょうか、爺ちゃんが植えた木でしょうか。「爺ちゃん」はもうこの世にはいないような気がします。「爺ちゃんの木」を枯らしてしまった哀しみを知っているかのように「かなかな」は鳴き続けます。

来世また蝸として君の手に

こま

「来世」には「また」秋の訪れをカナカナカナカナと知らせる「蝸」になつて、「君の手」に抱かれたい。なんと切ない恋の歌でしょう。他の生き物ではない「蝸」が、その切なさをかき立てます。人間としては、触れ得なかった「君の手」かもしれません。

第176回 2017年8月28日掲載

きくびより
菊日和

《秋》菊の香のしみ通るような、澄み渡った秋の日をいう。各地で菊花展が開かれたり、菊人形が作られたりなど、目や心に菊の存在を感じられる日和である。

天

ひかひかと手話の一回菊日和

とおと

「菊日和」と「秋日和」の違いについて、改めて考えさせられた今回の兼題でした。季語として取り合わせる時、どちらを選んでも一句としては成立するのですが、どちらを選ぶことがよりよい効果をもたらすか、そこが大事な選択となります。ポイントが「菊」の一字。菊の咲き薫る映像を含んだイメージが、効果的に生かされているか否かの判断になります。

今回推したいこの一句。まずは、「ひかひか」という不思議なオノマトペに惹かれます。しかも「ひかひか」が交わされる「手話」に対する擬態語であることに驚きます。ひ

らひらと動く手、目に見えない言葉がその空間を飛び交っている感覚。「一団」とありますから、人数のイメージもまた「ひかひか」という音のない空間の厚みとなります。

「ひかひか」とどんな会話が交わされているのだろうと思った瞬間に出現する季語「菊日和」が、なんと鮮やか。交わされているのは(二句の映像には映ってないけれど、確実にその世界には咲いているに違いない)「菊」を愛でる会話かもしれませんし、頭上に広がる秋晴れの美しさを喜ぶ会話かもしれません。

「菊日和」という句やかな季語が、「手話の一団」という人物たちを包み込む。その様子もまた「ひかひか」というオノマトペに収斂していくような思いです。

地

漣の半分は影菊日和

鞠月けい

「漣」は光と影でできている、ということに気付いた作者。「漣」という小さな光の瘤は、その「半分」を「影」としつつ動いていくのです。微細な映像を美しく切り取った一句ですね。

上五中七が水の光と影のみの映像ですから、「菊日和」という映像のイメージを内包した季語を選ぶのは、実に効果的。「漣」の行き着く岸には野菊が咲きみだれているに違いないと、読者の脳内にはさらなる映像も浮かんできます。

菊日和影もハシビロコフの形

くらげを

「ハシビロコフ」は、「ハシビロコウ(嘴広鶴)」ですね。ペリカン目ハシビロコウ科ハシビロコウ属に分類される鳥類なのだそうです。「嘴広鶴」という字のごとく独特の姿をしていますので、「影もハシビロコフの形」という淡々たる形容に共感しないではいられません。

仮に「秋日和」とした場合、光と「影」の関係を単に述べただけで終わってしまう。「菊日和」という季語の効果が十二分に味わえる作品です。

はたらいっている象つなく菊日和 酒井おかわり

生き物と取り合わせた句が思いの外たくさんありました。なぜか象の句も多かったのですが、「はたらいっている象」という措辞が巧いですね。下五の季語が「菊日和」ですから、インドとかアフリカで労働している象ではなく、日本の動物園の象に違いないと読めます。また、平仮名書きの「はたらいっている」は子どもたち相手に鼻で餌を取って見せたりしている「象」かなと、具体的な映像も浮かんできます。中七終わりの「つなく」の一語も絶妙。繋いでいる大きな鎖も見え、その鉄の色合いと「菊日和」との対比も効果的です。

金糸猴の上向きの鼻菊日和

初蒸気

「金糸猴」は「きんしこう」と読みます。ゴールデンモンキーの俗称だそうです。辞書には「頭胴長70センチメートル程度。鮮やかなオレンジ色と黒褐色の体毛をもち、孫悟空のモデルとされる。中国の四川省などに分布するが、個体数が減り、絶滅の危機にある。」と解説されていました。「上向きの鼻」とのみの描写ですが、この猿の顔つきの特徴が端的に書かれています。「金糸猴」と「菊日和」それぞれの字面の対比が面白く、「きんしこう」と「きくびより」という音もまた響き合います。

菊びよりかんときつねのとびさうな 緑の手

「きつね」という生き物の名前が入っていますが、生身のキツネという感じはあまりしません。着物の柄、のれん、コースター、小さなタペストリー、手ぬぐい、そんなものに描かれた「きつね」が「かんと」とびさうな「菊びより」でありますよ、と読みたい作品。「きくびより」「きつね」のキ音の中に響く「かんと」という擬態語が「菊びより」という季語の空間に響く。そこに詩があります。

本山の銅鑼じゃんじやんと菊日和 どかてい

「本山」という場所から「銅鑼」の音への展開。「じゃん

じやん」は銅鑼の音に対してはややありがちなおノマトペですが、下五「菊日和」の出現が鮮やか。高らかに「じゃんじやん」と鳴り出す「銅鑼」の音が秋の陽射しを揺すり、「本山」の境内には、住職が丹精込めて育てた菊の鉢が並んでいるに違いありません。

受付の硯の乾き菊日和

いまいやすのり

「受付」は何の会場かなと想像が動き出します。「菊日和」だから葬式ではないだろうし、結婚式だと「乾き」という描写がそぐわない。結局たどり着いたのが、書道展とか絵画展とかの「受付」。芳名帳に名前を書くための「硯」かなと思いましたが。静かな会場、晴れやかに並ぶ作品。「菊日和」の目出度い気分がぴったりです。

婦人部ときつねうどんと菊日和

赤馬福助

こんな「菊日和」もあっていいなと、楽しくなりました。「婦人部」ではなく「婦人部」と、全てが並立で置かれているのが、この楽しさを醸し出している理由。「婦人部」の人たちがいて、「きつねうどん」を売って、村の文化祭は気持ちの良い「菊日和」に恵まれました。文化会館と名付けられた小さな建物の外には、愛好家の皆さんがこれまた丹精込めた菊の鉢が並んでいたりするのでしよう。

菊びより月の抱く水地の抱く火 めいおう星

「菊びより」からこんな壮大な句が生まれるとは思いませんでした。何よりも素材に驚きました。「月」は「水」を抱いており、「地」は「火」を抱いている。その雄大な感慨が「菊びより」の明るさの中に置かれることによって、時空が美しく結ばれていく。今夜は、改めて「月」を見上げてみたくなった作品です。

以下、作者のコメントも興味深い。

●完全乾燥の状態と長らく信じられてきた月の内部に驚くほどの大量の水が存在するらしいです。そう聞いているから、見上げる月が、美しい水風船に見えて仕方ありません。／めいおう星

鯛 いわし

《秋》ニシン目イワシ類に属する海魚。一般的には真鯛を指していることが多い。暖流に乗って日本近海に大群が回遊してくるため、かつては漁獲量が多く安価だったが、近年では漁獲量が減少している。

天

満月の尻着くあたり鯛寄る

めいおう星

「満月の尻着くあたり」とは？と疑問に思います。完全な虚の世界、完全なるファンタジーかと思いきや、下五「鯛寄る」で一気に現実世界に叩き込まれたような感覚です。

「満月の尻着くあたり」は、未明の光景でしょう。月の入りの時間は、三日月、半月、それぞれ違いますが、満月に近い月が沈むのは夜明け前ごろ。暗い内に出港した鯛漁の船が、漁場に着く頃なのでしょう。

「鯛」の群れを探するのは、イマドキは魚群探知機でしょうが、かつては目視による魚見の判断。そろそろ漁場に着くぞという頃「満月の尻」が「着くあたり」の方向に、「鯛」の群れを見つけたのでしょう。それ、あの「あたり」だと、二隻の鯛船は一気に船足を速めます。「鯛寄る」海面のさざ波も見え、鯛網を放つ準備に甲板が活気づきます。

「満月の尻着くあたり」という措辞もさることながら、「鯛寄る」の五音のみで、一気に光景を立ち上げる力技。鯛漁ならではの迫力が言外に表現された作品です。

地

無線にがなりナブラに放つ鯛網

ほろよい

「ナブラ」とは、小魚の群れが大きな魚に追われて、海面にさざ波を立てて逃げる様子意味します。上五「無線にがなり」と字余りで始まる語順がよいですね。「ナブラ

に放つ」ですから、まさに今、鯛の群れの上において、「鯛網」がガラガラと放たれているのです。「無線」のガーガーという雑音とともに、漁師たちの怒声も飛び交います。

鯛焼く煙国見の煙かな

ひでやん

なんとまあ悠長な「鯛」の句でしょう。「国見」とは、天皇や地方の長が高山に登って、国の地勢、景色や人民の生活状態を望み見ることに。古事記には、仁徳天皇の国見の逸話があります。都を美しく整備したけれど、民の家から竈の煙が立ってない。それに気づき、即座に税を免除するお触れをだしたという話です。

路地に流れだす「鯛焼く」煙は、庶民の生活が無事に営まれている証拠。それもまた「国見の煙」ではないか、と思う作者は、仁徳天皇の気持ちになりきっているのかも。古事記を下敷きにした発想に拍手です。

昼からは釣れた鯛を餌にして

石川焦点

一日中釣りを楽しむ人たちにとっては、当たり前のことかもしれませんが、何をどれだけ釣らなくてはいけないという漁ではなく、のんびりと楽しむ気分が満ちている一句です。切れない型も、この句の内容に似ています。「鯛」をエサにして、さて「昼から」は何が釣れるのでしょうか。

鯛拾う鍋の取っ手の外れけり

未貫

「鯛拾う」とは、鯛の地引網ではないかと読みました。地域総出で引き上げる網。網から「鯛」を外そうとすると、あつちこつちでピチピチと跳ねまわります。「鯛拾う」ための「鍋」が決まっています。網を引く日はそれを持って浜に出るのでしょう。「鍋の取っ手の外れけり」の可笑しさ。拾った「鯛」を一杯入れた後で「取っ手」が外れたのだとしたら、それをまた拾い集める可笑しさも。

拇指に添うて鯛に流す水

剣持すな恵

「拇指に添うて流す水」とのみありますが、これは「鯛」を手で捌いているところだとすぐに分かります。「拇指」で背骨に滑らせて「鯛」を開いていくのです。「拇指」の感触、「鯛」という季語の実体、「流す水」の映像。語順が、実に巧いですね。魚臭さ、かすかな血の匂い、水の匂いが読者の鼻を楽しませてくれます。

ほうたれを千匹割きて手の脂

大塚迷路

「ほうたれ」は方言かな。私の故郷愛南町あたりでは、カタクチイワシを指す言葉です。「ほうたれ」を「千匹」割くとは気の遠くなる作業ですが、それを「割き」終わった時の「手の脂」のギトギトした感触が「千匹」の実感です。以下は、作者からのコメント。ちと笑いましたが、おっしゃる通り(笑)。

●先ほど「ほうたれを千匹割きて脂の手」を投げりましたが、俳句の神様が降臨して「ほうたれを千匹割きて手の脂」のほうがいんじやねー!?と言いやがった、言った、おっしゃったので変更します。これで更に秀句になりました、とき。／大塚迷路

鯛焼く一人はたまにだからよし

かをり

「鯛焼く」夕暮れでしょうか。今日、家族はみな出払って、誰もいない。「二人」の時間を楽しんでいるのです。私ならば、「鯛」を焼いて、嗚呼「二人」ってエエなくと冷酒を一杯、鯛のハラワタを舐めつつ、酒を舐めつつ。

が、ふと思うのです。これがずっと二人だったとしたら、「鯛」は随分と淋しい食べ物に違いないと。「二人はたまにだからよし」は、分かり過ぎる感慨ではありますが、そこにしみじみとした共感があります。

朝な夕な鯛を焼いて牧師館

樫の木

「鯛」と「牧師館」の取り合わせ。その接点は清貧のイメー

ジでしょうか。質素儉約に暮らす「牧師館」は子沢山の家庭ではないかと、勝手に想像しました。「朝な夕な」の食卓に並ぶのは「鯛」。家族みなが食前の祈りをする皿には、家族の数の鯛が並んでいるのでしょうか。

鯛焼くナザレの浜の女たち

えみこ
朶美子

「ナザレ」を調べてみると、イスラエルとポルトガルにその地名がありました。イスラエルの「ナザレ」は、イエス・キリストが少年期を過ごした町で、その生涯の大半をここ過ごしたようです。

ポルトガルの「ナザレ」については、以下の記述。「ポルトガル西部、大西洋に面する港町。名称は、4世紀に聖職者がイスラエルのナザレから聖母像を持ち込んだことにちなむ。代表的な海岸保養地の一つ。」

どちらの「ナザレ」と読んでもよいですね。「鯛」は世界各国獲れるのですが、いずれの国でも庶民の魚なのでしよう。浜で獲れた「鯛」を焼き、家族のための食卓を整える「ナザレの浜の女たち」は、キリストの時代からその営みを繰り返してきたのだなあと、しみじみ思います。

第178回 2017年10月9日週掲載

はぜもみじ 檜紅葉

《秋》檜はウルシ科の落葉高木で、紅葉樹が比較的少ない暖地でよく見られる。その紅葉は燃えるような紅葉と言うにふさわしい深紅色をしており、野山で特に目立つ。

天

ゆゆしくもこれも喪の色 檜紅葉

花屋

さまざまな葉が色づく秋です。「〇〇紅葉」という季語は様々ありますが、「檜紅葉」ほど激しいものはないのでは

ないか。それもただ強烈に赤いだけではなく、もつと複雑なイメージを内包しているのが「檜紅葉」ではないか。この句に出会った瞬間、あ！これだ、と思いました。これが「檜紅葉」の本意であると、心にストンと入ってきました。

「ゆゆしく」は、形容詞「ゆゆし」の連用形。この言葉の意味、振れ幅が実に極端なんです。基本的には「程度がはなはだしい」「重大である」「容易ならぬ」という意味ですが、そこから両極に意味が分かれます。「神聖でおそれおい」「すばらしい」「りっぱである」という意味は「自由し」という漢字が当てられ、「忌まわしい」「不吉である」「いまいましい」「うとましい」等の意味は「忌忌し」となるようです。

なぜこんなに極端な意味を持っているのか、調べてみました。「ゆゆし」の「ゆ」は、神聖の意味の「齋」を重ねて形容詞化した言葉なのだそうです。「ゆゆし」とは「神聖で触れることがはばかれる」というのが原義。考えてみれば、神という存在は、人の力ではどうにもならないことをやるから、神なのです。例えば、雷は「鳴神」です。人為の及ばない現象を人々は神の力なのだと考えました。それは神聖でありつつ、禍々しい神罰を下すものでもあることを、私たち人間は知っているから、神として恐れ敬うのです。

なんともまあゆゆしきことに、これも「喪の色」なのです。この激しい「檜紅葉」の赤は、本来は黒白が「喪の色」ですが、「檜紅葉」の赤であれば「喪の色」となり得る。なぜならば、「檜紅葉」は神聖さと禍々しさを共に有しているからなのだ。

「檜紅葉」の葉の形状の美しさ、赤の鮮やかさ。加工すれば蠟となる檜、人間に火を与えてくれると同時に、近寄ればカブレてしまう危険な植物、檜。神聖さと禍々しさ。その二つを有していなければ、あのような暗く激しく美しい赤にはなり得ない。そんな作者の詩的発見に、読者である私たちの心はハッと揺さぶられるのです。

地

塩飴を舐め百名山の檜紅葉

ぐわ

「塩飴を舐め」が字余りの上五。そこから中七下五で「百

名山の檜紅葉」と調べを取り戻します。「百名山」を歩く旅のおともは「塩飴」。季語「檜紅葉」の赤、「塩飴」の白のイメージの取り合わせもさりげなく利いています。

檜紅葉噴く変電所疼き出す

小泉岩魚

「檜紅葉」の強い赤を「噴く」と表現しました。山の一角が赤を噴き出しているかのような光景に、「変電所」が「疼き出す」と感じ取る。そこに詩が発生します。「噴く」という比喩、「疼き出す」という擬人化の重なりを、季語「檜紅葉」の強さが受け止めます。

はぜもみぢ曲がればおかめ蕎麦の店

くらげを

平仮名で表記すると気分が変わります。「はぜもみぢ」の角を曲がると「おかめ蕎麦の店」があるよ、という軽やかな一句。「はぜもみぢ」の美しい山の町は、蕎麦が名産なのでしよう。暖簾をくぐると、おかめのような愛嬌のいいおかさんが迎えてくれるのでしよう。名物「おかめ蕎麦」の味も格別です。

檜紅葉B群の猿帰りゆく

さるぼぼ@チーム天地夢通

「猿」というのは群を作って行動するのだそうです。観察を続けていくと幾つかの群になっていることが分かる。「B群の猿」という表現にリアリティとオリジナリティがあります。「檜紅葉」の奥へと帰っていく猿たち。猿のお尻が並んでいるさまも見えてきて。

檜紅葉おほきな猿は殿を

クズウジュンイチ

こちらも猿ですが、群という言葉を使わないで群を表現しているあたりがシブい。ひときわ「おほきな猿」が「殿を」いくのだという表現が巧いですね。近寄るとカブレしてしまう「檜紅葉」は人間の立ち入りを拒むイメージもあります。「檜紅葉」の向こうに猿たちの時があるのでしょうか。

櫛紅葉ここでは犬を喰ったといふ

ぐ

一読ギョツとしますが、「ここでは」をどう読み解くか。なかなか興味深い一句です。かつてこの村では「犬」を喰う習慣があったと読むのが、最も穏やかな解釈なのでしょう。かつて自分がこの山で遭難した時は、犬を喰って生き延びたと話す人物が目の前にいると読むと、ますますギョツとします。

櫛もみぢ将門の首飛んだとか

ヒカリゴケ

「櫛もみぢ」に血のイメージを重ねた句もたくさんありましたが、「将門の首飛んだとか」という伝聞の語り口が、ベタ付きを回避。「将門」の入道頭と「櫛もみぢ」が、どこかしら雅な取り合わせのようにも思えてきます。漢字と仮名交り「櫛もみぢ」も心を遣った表記です。

櫛紅葉千年積もる都かな

霞山旅

季語「櫛紅葉」に神聖と禍々しさのイメージがともにあるとすれば、「都」という存在も同じではないかと思えます。「櫛紅葉」は「千年」の昔からあったに違いないですし、「櫛紅葉」が「千年」もの間積もり積もってきた「都」であるよ、という虚の詠嘆には、美しくも禍々しい重みがあるように感じます。

あめゆじゆとてちてけんじや櫛紅葉

めいおう星

一瞬、なんだこの呪文は？と思つたのですが、あ！宮沢賢治か、と気づきました。「永訣の朝」の一節ですね。賢治の妹が、自分の臨終の時に「あめゆじゆとてちてけんじや」と言つたのです。「雨雪（みぞれのこと）を取ってきてちょうだい」とお椀を差し出す妹。胸に迫る光景です。

「櫛紅葉」が「喪の色」だという天の一句が、「あめゆじゆ」の句を、我が心と結んでくれたのだなと思えます。これもまた一期一会の出会いです。

櫛紅葉恋の終わりは晴れが良い

柝の音

うん、そうだね。さばさばと別れたいものね。秋の空は高く広い。「晴れ」た空の青は、別れの色かもね。が、しかし季語「櫛紅葉」は、ちと激しい。ちと痛そうな恋だ。禍々しい恋かもしれない。それでもやはり、いや、それだからこそ「恋の終わりは晴れが良い」のだ。

第179回 2017年10月23日週掲載

烏瓜

からすうり

《秋》ウリ科の蔓性多年草。夏の夕暮れには綺麗な白い花を咲かせるが、秋になると長卵形の長さ5〜7cmの実を結ぶ。初めは緑色で、秋が深まるにつれ朱紅色に熟した実は、蔓が枯れてもそのままぶら下がっている。

天

烏瓜あれは迷い家だつたのか

小川めぐる

「迷い家」とは『遠野物語』の中に出てくる伝承です。山中に忽然と現れる幻の家で、そこを訪れた人に不思議な富をもたらすという話。「マヨヒガに行き当りたる者は、必ず其家の内の什器家畜何にてもあれ持ち出で、来べきものなり。」とあり、何かを持ち出すと富者になれるといわれているのだそうです。

『遠野物語』では、「迷い家」に出会いながらも何も持ち出さなかった女に、後日、川上から赤い椀が流れてきます。女はそれを「ケセネギツ（雑穀を収納する櫃）」の中に入れて穀物を計る器として使ったら、いつまでたっても穀物が尽きなくなつた、という話が収録されています。

「烏瓜」の色は独特の朱です。ハツと心が動きます。見つけると得をしたような気分にもなりますが、見てはいけないものを見つけてしまったような、不可解な気持ちにもなる。不思議な実だなあいつも思います。美しいような

怖いような、ほのぼのと懐かしいような、はたまた妖しく隠微にも思え、そんな「烏瓜」の複雑な属性を踏まえた上で、「迷い家」と取り合わせたところに強く惹かれました。

「あれは」やはり「迷い家」だったのか。山中にあった豪奢な屋敷。立派な黒い門、牛小屋には牛、馬小屋には馬、広い庭には紅白の花、鶏の遊ぶ庭、朱と黒の膳と椀、火鉢にたぎる鉄瓶の湯。そして人のいない静けさ。恐ろしくなつて逃げ帰ってきたけれど、気が付けば手には「烏瓜」だけが握られていた。あれ以来「烏瓜」を見る度に、やはり「あれは迷い家だつたのか」という思いが去来する。

季語「烏瓜」の持つ本意を「遠野物語」の世界に見つけた一句。この「烏瓜」はいつまでもいつまでも虚の世界に鮮やかな朱を吊るします。

地

烏瓜探るかんばせを蔓が殴つ

Kかれん

「烏瓜」を見つけると採りたくなる。身を乗り出したり、山道から逸れて分け入り、蔓をグンと引つ張ります。すると、我が「かんばせ」を「蔓が殴つ」のです。

擬人化がそのまま映像の言葉となつている点、この句のよろしき。蔓を引く手の感触、蔓に打たれる「かんばせ」の感覚がありありと再生されます。

烏瓜さうだかう云ふ朱だつた

さとうりつこ

素直な実感を言葉にすることもまた俳句。「烏瓜」つてずいぶん見てないなあと思いつつ、偶然「烏瓜」に遭遇したのでしよう。「さうだ」と思い、「かう云ふ朱だつた」と納得をする。「烏瓜」という存在は、まさにこんな具合に認識されるよね、という共感の一句。

烏は知る風の抜け道烏瓜

うに子

「烏」たちは烏たちなりの様々な「道」を知っているに違いないのです。敵からとっさに逃げるための道、

雨を避けつつ移動する道、「風」の吹き抜けていく道。例えば「烏瓜」は、「風の抜け道」を覚えるための格好の目印になるでしょう。鳥の目線からの発想が素敵です。

烏瓜錆びゆく風の種子として

めいおう星

「錆びゆく風」と読むことも可能ではありますが、私は「錆びゆく」で切って読みました。「烏瓜」が次第に色褪せていく時間を作者は見つめ続けているのです。「烏瓜」は、秋の「風の種子」として錆びてゆくのだなあとという感慨そのものに詩があります。「として」の後の余韻もまた素敵。

烏瓜跨いで猫又の帰還

理酔

「猫又」は猫の妖怪です。山中に棲む獣の場合と、人間の猫が老いて妖怪になる場合とがあります。私は、山中に棲む妖怪猫が、暗に「帰還」してきたと読みました。落ちた「烏瓜」を跨いで「猫又」が「帰還」してきたぞ。何か獲物を啜えているのか、子どもでも攫ってきたか。日本昔話の一場面のような味わいです。

烏瓜空がだんだん苦くなる

24516

「烏瓜」はぶら下がっていますから、この季語に出会う時の私たちの視線は上向きです。当然、「烏瓜」の背後の「空」を詠んだ句はたくさんありますが、「だんだん苦くなる」という味覚の感覚で「空」の色や秋の深まっていく気分を表現したところに工夫があります。「空がだんだん苦くなる」に従って、「烏瓜」は次第に朱を増し、やがては錆びていくのです。

烏瓜いくつ浮かべてみづ昏し

長谷川凜太郎

山中の沼を思い浮かべました。「烏瓜いくつ」までは、読者は見上げる視線の「烏瓜」を想像しますが、「浮かべて」で脳内に出現している幾つかの「烏瓜」が水に浮かんでいる様子に変わります。このあたりの、映像の動かし方が自

然で巧み。下五「みづ昏し」は「烏瓜」との色の対比を表現しつつ、沼の匂いやいよいよ深まっていく秋の気分も醸し出します。

どの蔓にどの子吊るすや烏瓜

呑舞

ほんとは恐ろしい日本昔話みたいなシュールな句。猫又が攫ってきた子を吊るしているのか、言っことをきかない子はあるの「蔓」に吊るしてやるぞという親たちの威し言葉か。下五に出現する「烏瓜」の鮮やかさが、ますます恐ろしい。

貧乏はなかなか死ねず烏瓜

田中耕泉

上五中七の眩きに頷かざるを得ないのが、昨今の世相です。「貧乏」も死んだら終わるのだが、それが「なかなか」死にもできない。「烏瓜」は美味そうな色をしているが、食えもしない。腹の足しにもならない。そんな飄々たる開き直りにも読めてきます。

苦いのか甘いか死ぬか烏瓜

谷元央人

食べられるのかなと思っただ人たちが多かった「烏瓜」。食べたことのある人たちからは、凄く苦い！という報告も届いた今回の兼題でした。そんな「烏瓜」を、あれは「苦いのか」「甘いか」と見上げつつ、「死ぬか」と眩く。「烏瓜」は作者の思いをよそに、毒々しく朱く揺れているばかりです。

第180回 2017年11月6日掲載

舞茸

まいたけ

《秋》サルノコシカケ科に属するきのこで、日本各地で榎などの広葉樹の老木や、椎の大木などの根もとに生える。無数に分岐した、先端が扁平なへら型の柄が特徴で、食用として大変美味。

天

まひたけはてんぐのなづきもりはみづ

クズウジュンイチ

平仮名表記の句を読み解く時の私たちの脳は、文字を一つずつ音に替えて、単語を探り、意味を構築していきます。「舞茸は天狗のなづき」ん？「なづき」ってなんだろう？と思いつつ、下五まで読む。「舞茸は天狗のなづき森は水」

ここまできて、「なづき」って何だろう？ともう一度首をかしげる。辞書を引く。「なづき……とは、脳・脳髄・脳蓋骨などの古名」と分かった瞬間、ハッ！とこの句に慄く。「舞茸」は脳みらいという句は沢山あったし、アインシュタインの脳だと特定する発想の句もありました。が、「なづき」という言葉で「まひたけ」が表現されると、そちらのほうがしつくりきます。しかも「てんぐ」のそれだとなると、いよいよ山の空気が滲んできます。

さらに下五の着地がきれい。「まいたけは「てんぐ」の「なづき」みたいな色と形で育っているよ。そしてこの「もり」は「みづ」でできているような美しい湿気に包まれているよ。こんな森でとれた「まひたけ」はさぞ生き生きと大きいに違いありません。そしてシャキシャキと美味いに違いありません。

地

月齢は十四舞茸跳ぶ準備

まどん

「月齢は十四」いよいよ明日は満月。森に生息する「舞茸」たちは、十五夜の月に向かって「跳ぶ準備」を始めています。飛ぶではなく跳ぶです。あのひらひらとした「舞茸」たちが、満月を喜んでピョンピョン跳ぶ様子を想像するだけで楽しい。そして可愛い。

侏儒となり舞茸林に分け入りぬ

あつちゃん

「侏儒」とは小人。自分が「侏儒」となって「舞茸」の「林」に分け入るところを想像しているのです。「舞茸」の生えて

いる「林」と読んだときと、「舞茸」そのものを「林」と見立てていると読んだときと、「侏儒となり」の大きさ？身長？が変わってきます。皆さんは、どちらで読みたいですか？

舞茸はひらひら小人はくすくす あるきしちはる

同じく「小人」になる発想ですが、イメージがぐっと明るくなります。「舞茸」に対して「ひらひら」という擬態語を使った句はこれまた沢山ありましたが、後半「小人はくすくす」という童話の世界への展開が愉快。「舞茸」がひらひらと育っていくだけで、笑い上戸の「小人」たちはくすくす笑い出すのでしょうか。

舞茸を呉れて宮司の人嫌ひ

樫の木

「舞茸」を誰かに貰うという発想の句も沢山ありました。「椎茸」でも「大根」でもよい？というものが多かったですが、この句は「舞茸」と「宮司」の取り合わせがいいですね。

「人嫌ひ」の「宮司」は、人との付き合いを避けて、しよつちゅう山に入るのでしょうか。自分だけが知ってる「舞茸」の在りか。採ってきた「舞茸」をおすそ分けする時だけ、「宮司」は人づきあいをほんのちよつと喜ぶのかもしれない。「宮司」の装束の雅やひらひらとした袖の動きが、「舞茸」にそこはかとなく似合います。

舞茸やかすかに臍の匂いする

西尾婆翔

一読、頷いてしまいました。「舞茸」独特の匂いが、ありありと我が鼻孔に蘇りました。「臍」の匂いをわざわざ嗅いだことはないけど、「舞茸」のしんと暗いような「匂い」と「臍」との思いがけない取り合わせが生み出したリアリティ。嗅覚一点勝負でよくぞここまで！と感嘆した二句です。

舞茸を採ればこの木は倒れそう

石川焦点

森に入り、天然の「舞茸」を見つけました。それはそれ

は大きな「舞茸」が木の根のあたりに生えているのでしよう。嬉々として採取しようとしつつ、この「舞茸を採れば」と考える。この「木」は倒れてしまうのではないかと、と咬くことで、主役たる「舞茸」の大きさや存在感を読み手に伝える。巧い一句です。

袈裟洗ふごと舞茸の煮られたる

堀口房水

このリアリティにもやられました！「舞茸」を煮ると黒い汁が出てきます。あれを「袈裟洗ふごと」とした比喩の愉快。色合いといい、ひらひらした形といい、まさに「袈裟」だと納得。先ほど、宮司の句もありましたが、「舞茸」は神事や釈教とも相性がよいのかもしれない。

芸術のほんしつ舞茸にバター

斎藤秀雄

こちらは、スーパーで買ってきた「舞茸」でしょう。農業工場で生産される均一的な「舞茸」を思いました。「芸術のほんしつ」について考えている人物は、まずは食うという目の前に必要に直面しています。包みをやぶり「舞茸」を取り出し、適当にちぎり、フライパンに放り込む。そして「舞茸」には「バター」だなど呟く。バターの溶けていく様子に、「舞茸」にしんなりと火が通っていくさまに、「芸術のほんしつ」を感じ取っているのかもしれない。

まひたけはやうにほとほるほとのやう

凡鑽

天に推した句と同じく、平仮名書きです。眼球に映る平仮名を一字一字認識しつつ、単語として理解しようと脳が動き出します。「舞茸はやうに？」上五が「舞茸は」だから「やうに」が「様に」のはずはありません。知っている単語を脳が検索します。「夜雨？」

さらに続くのが「ほとほるほと」なんだ？と思う。下五から推測していこうと頭を切り替えます。「ほとのやう」あ！「陰（女性の陰部）」か。そこが分かれば、「ほとほる」が「熱る（＝ほてる。熱気を発する）」であると解説ができます。「舞茸は夜雨に熱る陰のやう」。

判じ物を解いた快感と共に、意味というモノが押し寄せてきます。「まひたけ」のひらひらした印象、「やう」を喜びつつひつそりと熱を帯びつつ育っていくに違いない舞茸。「ほとほる」は「まひたけ」にも「ほと」にも意味を広げつつ、妖しい存在感を醸し出します。天狗の脳だという人もいれば、熱を帯びた陰部だという人もいる。「舞茸」という季語の奥行を見せてもらったような作品たちに、感銘ひたすら。

第181回 2017年11月20日週掲載

ひれざけ 鰯酒

《冬》河豚の鰯を炭火で焦がすぐらいにあぶり、湯呑みに入れて熱燗の清酒を注いだもの。蓋をしてしばらく置いた後、揮発したアルコール分をマッチの火で燃やしてから飲む。

天

鰯酒や会津と聞けば売る喧嘩

樫の木

「鰯酒」を「熱燗」としてもOKではないか。そんな自問自答を繰り返しての選句でありました。悩みに悩んでこの一句を「天」に推すことにしました。

「鰯酒」は河豚の鰯。河豚の産地は、かつての長州いまの山口県。そして「会津と聞けば売る喧嘩」とは、明治維新の長州と会津の因縁を指しているのだと気づく。お！なるほどそうきたか、と膝を打ちました。

会津戦争は明治元年（1868年）の出来事。大河ドラマ『八重の桜』でも描かれていた壮絶な戦いです。白虎隊の少年たちの死にさまざま悲惨でした。戦後も新政府軍は、会津の死者を埋葬してはならずという命令を下し、一時遺体は野ざらしにされていたそうです。

記憶が曖昧で恐縮ですが、長州山口のある市長が、会津福島のある市長に「もう百二十年もたったのですから、仲

良く交流しませんか」と申し出たら、会津の市長は「まだ百二十年しか経っていません」と断ったとか。そんな因縁の残る「会津と聞けば売る喧嘩」なのです。

熱々の鰯酒を注文する。やはり河豚鰯は我が故郷山口のものでなくては、なんて思いながら鰯酒を啜っているのでしょうか。カウンターの隣の客の話が否応なく耳に入ってくる。ん？「会津」の話か。次々にでてくる会津自慢を聞くともなく聞いていると、何が会津だ……という気持ちがあふくと湧いてくる。ついつい「喧嘩」を売るようなちよっかいを出してしまう、という場面。

「鰯酒」の蓋を開けて、一瞬燃やすマッチの火。その火は、長年の恨みつらみのように着く揺れています。この「喧嘩」の顛末はどうなったのやらと思うことしきりの一句。

地

ひれ酒やきゅんと鳴きたる夜のありし

やぶうりついで

焦がした鰯を放り込み、熱々の酒を注ぐと、かすかに「きゅん」と音を立てます。「ひれ酒」の焦げた鰯もきゅんと鳴き、「ひれ酒」を呑む我が心もきゅんと鳴きそうな夜もあったなあ、という感慨の一句でしょうか。

へえあの鰯酒なんて頼むんだ あるきしちはる

とりあえずの生ビールを飲み終われば、それぞれ好みのお酒に切り替えます。いきなり「鰯酒」を注文したのは「あのこ」。ちよつと気になっている友だちか、同僚か部下か。「鰯酒」を頼むという行為から、日ごろの「あのこ」のイメージや「鰯酒なんて頼むんだ」という作者の心の動きが読み解けます。そこがこの句の面白いところです。

鰯酒や燐寸は黙るために擦る

シニアモモ

「鰯酒」のアルコールを飛ばすためにつける「燐寸」の火でしょうか、煙草に火をつけるための燐寸でも、ランプに

火をつける燐寸でも、「燐寸は黙るために擦る」という台詞に心理的真理があります。「鰯酒」の瞬の青い火。「鰯酒」の匂いに沈黙が広がります。

旅情とも思う疲れと鰯酒と

青菊

河豚そして「鰯酒」の美味い地への旅でしょうか。「旅情とも思う疲れ」という措辞に共感します。「疲れと鰯酒」という並列、切れの無い型が、下五の余白に余情を醸し出します。「旅情」という名の「疲れ」が匂やかに滲みまします。

鰯酒をふくみ病歴勇ましく

かもん丸茶

「鰯酒」を口にふくみ、話し始めたのは「病歴」。河豚の毒なんて恐ろしくもへったくれもない！といわんばかりに繰り広げられる「病歴」の数々。私の句友にも、癌の手術を五回やり、さらに糖尿病も患いつつ、ロッキーマウンテンを履き、八十八カ所を歩き、月に一度は横浜から故郷愛媛に住む母親の介護に通う、そんな豪傑の爺さんがいます。この句の「病歴勇ましく」は、病歴そのものだけではなく、この人物の生きざまも勇ましいに違いないと思うのです。

鰯酒や死ぬまでは生くタバコに火

矢嶋博士

「死ぬまでは生く」は当たり前のことですが、人間はみな死ぬまでは生きてるのだから、「鰯酒」も飲むし「タバコ」も吸うぞという開き直りでしょうか。「鰯酒や／死ぬまでは生く／タバコに火」の三段切れが、この句の内容に巧くハマりました。この平然たる覚悟で呑む「鰯酒」も美味いに違いありません。

鰯酒を干す弔ひの火を以つて

耳目

さつき燃やした「鰯酒」の火は「弔ひ」の火だ、と心中合掌しているのです。一緒に「鰯酒」を呑んだ盟友の死でしょうか。熱い「鰯酒」も物思いに浸っているうちに少し冷めてきたのかもしれない。「干す」の一語に無念が広がります。

鰯酒や先生俺もう五十だよ

ばむだ木下

「鰯酒」を注文する。何十年ぶりに会った「先生が、おまえ生意気に鰯酒なんか注文するのか」と笑ったのかもしれない。「先生俺もう五十だよ」という言葉に、先生との遠慮のない人間関係も見えてくる。この夜は、師弟揃って美味しい「鰯酒」を呑んだに違いありません。

第182回 2017年12月4日掲載

みずか

水涸る

《冬》冬に晴天の多い太平洋沿岸地方や、雨ではなく雪が降る北日本や北陸地方では、川の水が著しく少なくなる。この時期を待って護岸工事や砂利採取などが行われる。

天

水涸るや月の匂ひのする小石

24516

傍題の句にも魅力的なものがありませんが、今週は季語「水涸る」に挑んだ句を「天」に推そうと決めておりました。蕭条と涸れきった冬の川の情景を、月面に見立てる発想はありましたが、この句は季語と作者の出会いが鮮やか。「水涸る」を大景として捉えるのではなく、そこにある一個の「小石」を描写することで、季語「水涸る」を表現しました。

「○○の匂ひのする○○」という措辞は類型の一つですが、それを使いこなしています。(いつも言うことですが、「類型は使いこなす。類想は回避する」という意識が肝要です。)匂いを嗅いでいる以上、「小石」を手にしているであろうことが想像できますし、それが「月の匂ひ」のようだと述べることで、水が涸れている川がまるで月面のように冷たく灰色に広がっているのだということも読み取れます。

「月の匂ひ」は虚の嗅覚ですが、「月の匂ひのする小石」

は虚の嗅覚を持った映像へと転換。上五の季語の力と相まって、掌の「小石」は冴え冴えと冷たく匂うのです。水の涸れた川底の「小石」を一つ我が手に載せることで、季語「水涸る」と作者が一気に結ばれたのだという現場証明のある作品でした。

地

水涸れてあれば海より来たる鳥 香野さとみ

「水涸れて」しまった川のところどころに少しずつ水が残っているのでしょうか。水場を求めて「海」の鳥たちも川を遡ってくるのでしょうか。読んだ瞬間に、私の脳裏には海鷗が浮かびました。季語の世界に点在する長くて黒い首が生々しく見えてきました。「あれば海より来たる鳥」という眩きは、見晴るかすイメージを含んでいる措辞です。

水涸れて義眼のような鳥の群 いなべきよみ

同じく鳥を題材とした句ですが、味わいは全く違います。「水涸れて」の後に出現する「義眼」の一語、寒々とする石を「義眼」に見立てたのかと思いきや、「義眼のような鳥」という展開が巧いですね。比喩の鮮度と、それが「群」になっている状況が、一句の詩的世界を構築。乾いた寒さと不穏が募ります。

岩すべて山の骨片水の涸る 榎の木

「岩」は全てが「山の骨片」であるよという定義が詩を生み出します。長い年月をかけて、山から押し流されてくる岩が石となり小石となって川を作ります。それらを「骨片」と呼ぶに相応しいものに感じさせるのが下五「水涸る」という季語の力。下五「水の涸る」と終止形でしっかりと言い止めると、一句に背骨が通ったかのような力強さが生まれます。

以下は作者の体験談。

●長野では山荘に住んでいたのですが、その前を木曾駒ヶ

岳の沢が流れておりました。花崗岩とおぼしき白い岩がごろごろとしており、水の少ない冬期はとりわけ荒んで見えました。／榎の木

口笛を吹けば情死の川涸れる かまど

「口笛」は懐かしくも不気味にも描くことのできる言葉。「口笛を吹けば」は心楽しい思い出かと思いきや、「情死の川」という措辞にて、作品の世界は反転します。かつて「情死」事件があった「川」は今年も寒々と涸れているよ、という一句。情死した二人の魂は、白く涸れた石のように今も浮遊しているのでしょうか。

水涸れて伐採の香の甘やかに かま猫

水の涸れる頃になると、何もかもが枯れ果て川も山も空も剥き出しになります。「伐採」の音が続けば、やがて「伐採の香」もしてきます。嗅覚の鋭くなる冬。その「伐採の香」を「甘やか」であると感じ取るところに、鮮やかな詩が生まれます。「水涸れて」という世界にも、こんな豊かな表情があるのだと嬉しくなった作品です。

水涸れてかみつきがめのあくびかな せり坊

「水涸れて」いる川には、こんな亀が残っているかもしれませぬ。「かみつきがめ」という狂暴そうな亀ですが、「かみつきがめあくびかな」という展開が絵本のような楽しさ。水は涸れちゃったけど、ま、なんとかなるか、なんて「あくび」をしているのでしょうか。ほのぼのとした「水涸る」の一句。

沼涸れて此処は墓だつたのですね マカロン

季語「水涸る」の傍題は、「沼涸る」「川涸る」など場所を明確にするものです。水が涸れて沼や川の底から色々なものが出現してくるといふ発想の句は沢山ありましたが、「沼涸れて」という光景から展開する「此処は墓だつたの

ですぬ」という十二音は、不穏な眩きとして、読者の耳奥へ流れ込んでいきます。意味をとらえた瞬間に、読者の脳裏には沼の底に林立する「墓」の光景が立ち上がってくる。ひたひたと恐ろしい句です。

涸川や犬引きずっているナニカ ぐ

傍題「涸川」の一句。灰色の「涸川」の底に居るのは「犬」です。よくよく見ると「ナニカ」を「引きずっている」のが分かります。一句の眼目は、この語順と「ナニカ」という措辞。「犬引きずっている」の後に出現する「ナニカ」が、読者を不穏な心持にさせます。上五「や」の強調が利いている一句。

月光の涸川のぼる象の列 くらげ

これも傍題「涸川」ですが、下五の展開にハッとします。「月光」の下には白く光る「涸川」がある。その川をのぼっていくものが「象の列」であるよ、という虚の世界。いやいや、ひよつとするとアフリカなどでは現実の光景として見られるのかもしれないね。これも「天」に推したかった作品。「涸川」も「象」も灰色の美しさ。

第183回 2017年12月18日週掲載

炭 すみ

《冬》ナラ、クヌギ、カシなどの木の幹や枝を適当な長さに切り、窯で蒸し焼きにして作る。作り方によって様々な種類があり、用途も様々である。

天

酢酸の臭ふフィルムや炭をつぐ せり坊

一読、全く個人的な感慨が鮮やかによみがえってきた一句を「天」に推させていただきました。

昭和三年生まれの父は、カメラに凝っておりました。父と母と妹と私の四人は、大きな母屋の向かいにある離れで暮らしていて、その平屋造りの離れの廊下の端っこには父の暗室がありました。

私は、この離れで、お産婆さんの手によって生まれましたが、その生まれ出た瞬間からの写真が今も残っています。暗室から臭ってくる独特の刺激臭は、幼児体験として強く刻まれている嗅覚。「酢酸の臭ふフェルムや」という措辞によって、一気に幼年期にワープしてしまいました。

「酢酸」は写真を現像するときの定着液(停止液)として使われます。うちの離れの廊下にも、水洗いした後の「フェルム」がずらりとぶら下げて干されていたものです。その「フェルム」を見上げながら、父は火鉢の「炭」をつぎ、やれやれとショートホープに火をつけてふかし始める。「酢酸」の臭いにかぶさるように「炭」の爆ぜる匂いがしてきます。ある時代の手触りが伝わってくるような一句。これが俳句の力なのだと、改めて感じ入りました。

最近、マイクロフィルムが酢酸化する「ピネガーションドルーム」という現象が起こっているようです。「酢酸の臭ふフェルム」が、長期保存されていたマイクロフィルムであるという読みも否定はできませんが、だとすると下五の季語「炭をつぐ」という時代の手触りは一気に失せます。ここはやはり、古い時代の古い暗室を思うのが妥当ではないかと考えるのです。

地

キンキンと割れる佳き炭木に木霊 あまぶー

「キンキン」という音は、美しい備長炭でしょうか。うちも火鉢を使っていますが、「佳き炭」の音はほんとうに美しい。下五「木に木霊」とありますから炭焼き小屋かな。「キンキン」ヨキスミキノコタマ」という響きも美しいですね。

今年も良き炭できました天狗殿 多々良海月

炭焼きを生業としている人の言葉でしょう。「今年も良

き炭できました」だけだと、林業組合のCMで終わってしまっけど、下五「天狗殿」と呼びかけることで、詩が生まれてきます。山の恵みのおかげで、毎年焼くことができる「炭」。感謝を込めての一句です。

御籤買ふひよんなことから炭も買ふ 椋本望生

「御籤買ふ」のは神社。ただお参りに来ただけなのに「ひよんなことから」とまあ「炭も買ふ」ことになってしまった。落語の一節のような語り口も軽妙。誰が?なんで?と想像すると、ますます笑えてきます。この一句で新作落語が一つ書けてしまうかも。

炭つぐやつけているのはラジオ劇 ラーラ

切れ字「や」はすぐ上の言葉を強調します。「つぐ炭や」ならば、「炭」を強調するのですが、この場合は「炭つぐや」ですから「つぐ」という行為や手元を見せるわけです。「や」で映像のカットが替わり「つけているのはラジオ劇」。静かな部屋に「ラジオ劇」の声だけが聞こえてくる。これも古き良き時代の手触りを詠んだ一句。

寒星を打ち合はせたる炭の声 めいおう星

「炭」を「打ち合はせ」たときの音色を様々に比喻する句もたくさんありましたが、「寒星を打ち合はせたる」という音は、まさに硬く焼きしめた上質なる備長炭の音。下五「炭の声」という季語の美しさが凛々と響いてくる一句です。「打ち合はす」という複合動詞の描写も的確。

ふるさとほロシアのむこう炭をつぐ 月の道

「ふるさとほロシアのむこう」は、外国に住んで日本を思う心なのか、日本に住んで遥かなる祖国を思う心なのか。どちらからの読みもできますね。季語「炭」がこういう規模で愛国心を語るのだから、意表を衝かれた作品です。

金鳥の缶に消炭貯めにけり さるぼぼ@チーム天地夢通

「消炭」とは「まきや炭の火を途中で消して作った軟質の炭」です。火がカンタンにつくので火種として使います。「金鳥」は、蚊取り線香りの商品名。その空き缶に消炭を入れていたのでしよう。これまたある時代のアルアル感が見事。ずっと使ってるから、蓋あたりには錆びの兆している「缶」なのでしようねえ(笑)。

同時投句「消炭に鉄砲虫の穴の跡」もよく観察している一句です。

炭で描く地図おなごには教えるな 霧子

筆記用具がないから、その辺にあった「炭」で地面に「地図」を書いているのです。何かある場所なのかは語っていませんが、「おなごには教えるな」ですから、男だけが出入りする悪所か、はたまた女人禁制の霊山の宝の場所か。さまざまに想像が広がります。

鼻毛とは健気なるもの炭俵 小泉岩魚

なんとも愉快な俳諧味に思わず笑ってしまいました。焼きあがった炭を詰める作業をしているのでしょうか。一つ一つ「炭俵」を作っていると、炭の粉で鼻がむずむずしてくることもある。そのムズムズ感を「鼻毛とは健気なるもの」という措辞で表現する愉快。作業が終わった後の「鼻毛」の黒さも見えてきます。

「炭」と「炭俵」を別物として採録している歳時記もありますが、この句の下五が「炭を挽く」だとワザとらしいです。し、「炭をつぐ」だとリアリティが欠ける。やはり「炭俵」あたりがよからうかと納得しております。

探梅

たんばい

《文》梅林や庭園などに植えられたものではなく、まだ雪深い山などに、春の知らせとして春に先駆けて咲く梅を尋ねることをいう。

天

探梅や天智天武の恋幾たび

めいおう星

兼題「探梅」は、冬の人事の季語。「雪深い山に梅を尋ねること」と歳時記には解説してあります。春告草とも呼ばれる梅を探しに行くという風流が、季語の核となります。天智天皇、天武天皇が生きていた時代には、花といえは「梅」を意味していました。額田王をめぐる三角関係説もある、兄の「天智」と弟の「天武」。彼らの「恋」が「恋幾たび」も華やいだ時代には、かくわしい梅の香りが似合います。雪深い山に梅を尋ねて分け入っていく「探梅」は、かの時代の相聞歌のイメージと重なります。

季語「探梅」の野生味と情趣を表現しようとする時、万葉集の時代の「恋」と取り合わせる手があったか！と、膝を打った次第です。上五の季語を強める「や」から、下五「幾たび」でおさめるあたりのバランス感覚もさすがの一句です。

地

スクナヒコナの溺れし川よ探梅行

霧子

「スクナヒコナ」は少彦名とも書き「スクナヒコナ」とも読みます。「粟茎あわがに弾かれて淡島より常世国に至った」とか「ガガイモの舟に乗り、蛾あるいは鶴の皮を着て海上を出雲の美保崎に寄り着いた」と言われる小さな神様です。かつて「スクナヒコナ」が溺れたという伝説のある「川」にそって、梅を探しているのでしょう。神話の世界と、どこにあるのか分からない梅の存在が響き合います。冷たい

川音も聞こえてきます。

探梅やぼつくり寺にちよいと寄り

華女

「探梅」のついでに「ぼつくり寺」に寄ってお参りして行くこうというのが愉快。梅を探すことも、寿命を測ることも似たようなものかもしれません。「ちよいと寄り」という軽さも味わいです。

探梅や青猫のゐる墓地抜けて

海風山本

「梅」と「青」の字面は金子兜太さんの「梅咲いて庭中に青鯨が来ている」が思い出されますが、こちらは冬の季語「探梅」にして鯨でなく「青猫」。萩原朔太郎の詩集『青猫』を連想もしました。

「青猫のゐる墓地」は異世界への抜け道のようでもありつつ、飄々たる「青猫」の表情も想像され、如何ようにも読み解ける作品です。

探梅や去年無かつた川に会う

灰色狼

あれ？「去年」も同じ径を通つただけど、こんな「川」は確かなかつたはずだ。径を間違えているのか、上流のどこかが崩れて、水の流れが変わってしまったのか。天狗に騙されているのか。「探梅」の行方は、果たしてどうなるのでしょうか。淡々たる語りに味がありません。

この先は恐ろしけ淵探梅行

きんえんくん

「この先」にあるのは、その名も恐ろしい「恐ろしけ淵」。そんな場所に分け入っているささやかな緊張感。季語「探梅」と地名「恐ろしけ淵」の取り合わせがいいなあ。冷たい水音がのぼってくるようです。

探梅の声や静かな活断層

酒井おかわり

「探梅の声」が賑やかに聞こえてきますが、彼らの歩い

ているその地層は「活断層」であるよ、というのです。「静かな」の一語が静かな迫力となって「探梅」の人々に迫ります。名詞止めもまた静かな迫力。

探梅といふも日向の長つ尻

藤井祐喜

「探梅」に来たというのは聞いたけど、さつきから一向に歩き出そうとしない人たち。「くといふも」からの展開が愉快にして、「日向の長つ尻」という措辞も飄々として愉快です。

探梅にちと深すぎる山である

井上じろ

何を今更？という眩きに、思わず笑ってしまいました。まさかここまで深い山だとは思わなかった、という困惑。「ちと深すぎる」という措辞に幾分かの強がりも入り混じっていて、これまた愉快。

無理に横切りたく探梅の斜面

ウエンスデー正人

どうもあそこに咲いているように見えるが、この「斜面」を横切るのが近道ではないかと、強引に急斜面に踏み出す人物。これは最早「探梅」ではなく探検ではないのか。五七五を裏切る強引リズムもまた然り。

在りそうな場所は最後に探梅行

うさぎまんじゅう

さつきと最初からここに連れてきてくれたらよかつたじゃないの！と言いたくなるような「探梅行」ですが、「在りそうな場所は最後に」行ってみるつもりなのだが……という期待の一句と読むべきかもしれません。「探梅」の心理をさりげなく言い止めた一句です。

ラグビー

《冬》1823年、イギリスのラグビーという町の学校で、サッカーの授業中に生徒がボールを抱えて走り出したことをきっかけに誕生した。日本には明治32年(1899年)、イギリス人の英語教師により伝えられた。

天

ラグビーのキック一瞬とは長し ちやうりん

『カラー版新日本大歳時記』の「ラグビー」の項には、以下のような解説があります。「1823年、イギリスのラグビーという町のパブリックスクールで誕生した。体育の授業でサッカーをやっていたところ、エキサイトした生徒が突然ボールを抱えて相手ゴールめがけて突進し、それを阻止しようと大勢の生徒がタックルした。それを見ていた先生が考案した。」ルール違反だと叱らずに、それを新しいゲームにしてしまう先生が偉いなあ！そして、紳士の国のイギリスで、ずいぶんと激しいスポーツが生まれたものだなあ。

兼題「ラグビー」の「天」に推したこの一句、読んだとたん、トライの後のキックを思いました。まさに五郎丸選手のコンバージョンキック(トライをした後にゴールポストに向けてキックすること)です。

サッカーとラグビーの違いをどう表現するかが難しい兼題だったと思いますが、後半の措辞「一瞬とは長し」とは、まさにコンバージョンキックに違いないと確信をもって読みました。

残り時間はいくらもないという場面。トライを決めて同点に追いついての「キック」。念入りに位置を決め、ゴールポストを睨み、ルーティン(無意識に行う決まりきった手順)どおりの歩数をとっての助走、引き締まる筋肉、土を掴む靴底のスパイク、そして「一瞬」のキック！くるくると回転しながらゴールポストへと飛んでいくボールを見守る選手たちと何万人の観客の目。ゴールポストの間を通過した

地

ラグビーの髭に芝生の切れつばし

クズウジユンイチ

スクラムが崩れて、立ち上がるとその強面の「髭」に「芝生の切れつばし」がくつついている。髭だけをクローズアップしていますが、ユニホームのあちこちにもくつついていることは想像できます。細部を映像として切り取ることで、「ラグビー」ならではの激しさを表現することもできるのですね。

ラグー等の掴みし縞の歪みおり くめ仙人

こちらは手元に注目しました。スクラムでしょうか、タックルでしょうか。「ラグー等」が掴んだジャージの「縞」が歪んでいるということに気づくのが俳人の視点です。最後の「おり」は、ある一定の時間を含んでいることを意味する助動詞ですから、そこにも激闘の感じが滲みます。

ラグビーや二人ぶら揚げなだれ込み すりいびい

試合の画面を見ているかのような動きですね。「や」の強調の後の「二人ぶら揚げ」がいいです。「二人」のタックルを引きずったまま、トライする。「ぶら揚げ」という措辞で、巨漢のラグーマンが想像できる点も巧いなあ。

円陣のラグーひしやげた耳の湯気 月の道

「ラグー」たちの「耳」は独特のかたち「ひしやげ」ます。

そこに焦点を絞ってみるのも一手です。最初の「円陣」の一語で状況と映像を、最後の「湯気」で臨場感を表現。「円陣のラグー」で一度カットが切れて、「ひしやげた耳」のアップになるカメラワークもいいですね。

先ほどの句と似た場面をこんなふうにした一句も発見！「ラグビーやトライの腰に敵三人/月の道」中七の「腰に」という部位、下五「三人」という数詞が映像を描きます。

なま熱き唾で磨かれラグビーボール 鈴木牛後

キックの前か、スローの前か。「ラグビーボール」にくつついた泥が気になる場面でしょうか。ボールを抱え込み「なま熱き唾」で手早く磨き、どこに蹴るか投げかかを素早く思案しているのではないかと。「ラグビーボール」で季語になるか？という疑問を持つ人もいるかとは思いますが、上五から中七の措辞にリアリティがあり、季語ラグビーの現場が立ち上がってくる。それがこの句の巧さです。

ラグーらの塊ほぐれ前歯吐く

一阿蘇二鷲三ピーマン

「ラグーらの塊ほぐれ」ははつきりと映像になっていますが、ここまでの措辞はある程度想定できます。が、下五「前歯吐く」に驚いてしまいます。この激しい競技の特徴を生々しく描いた一句。このような場面を見たことがあるかのような気持ちにさせるのが、この句の底力です。

後ろへ後ろへラグビーボールは不発弾 妹のりこ

「後ろへ後ろへラグビーボールは」までは、あまりにも当たり前。そのぐらいのルールは知ってますよ、と思つたところに出現する「不発弾」の一語。ラグビーという競技の特徴的な動きに、別の想像をぶち込みます。爆発するかもしれない「不発弾」を自分ではない誰かに押し付ける？みたいな、マンガ的味わい。そしてこの競技場はまさに戦場だという迫力。それらを同時に、「不発弾」の一語が構築しているのが、実に面白い！

ラグビー等の撃たれしやうに倒れをり ラーラ

数人が飛び掛かるタックルでしょうか。「ラグビー等」が一気に崩れていく様子を、誰かに狙撃されて「倒れ」たかのように感じたのです。「撃たれ」という言葉が、ラグビーの激しさを表現。最後の「をり」は時間を含んだニュアンスですから、倒れたままの光景が見えてきます。

ラグビーの空17メートルの青 すみつこ忘牛

「ラグビー」は冬の季語ですから、この「空」は冷たい冬の空です。そして「17メートル」はゴールポストの高さ。白いゴールポストのあそこを狙うと見上げれば、その空間には鮮やかな「青」。いよいよキックの時が迫ります。

ラグビーやぶちのめされて黄ばむ空 那須新香

「ラグビーや」と強調した後の「ぶちのめされて」という率直な言葉。負け試合の悔しさ、肉体的にぶちのめされた痛み等がこの措辞にもあります。下五「黄ばむ空」は夕暮れの映像でありつつ、落胆という心情でもありつつ。嗚呼と空を見上げて、ラグビーたちは明日への闘志をかき立てるのでしょうか。

同時投句の中七も巧い表現です。「ラグビーやすつから かの耳に笛 那須新香」

第186回 2018年2月12日週掲載

石蓴 あおさ

《春》沿岸の浅海に産する緑藻類アオサ科の海藻。岩石や杭、他の海藻などに付着したり、浮遊しているものもある。食用には初春の頃に採取するのがよい。

天

わたつみのごりそこねしあをさかも とおと

今回の兼題「石蓴」は、石蓴でも天草でも若布でもいいんじゃないか?という自問自答との闘いでもありましたね。「天」の一句には生活感がある作品をいただこうと決めたのですが、この句に出会って、うーむと唸ってしまいました。

「わたつみ」とは、日本神話の海神を指しますが、海や海原そのものを指す場合もあります。海が凝り損ねたものがこの「あをさ」なのかもしれないよ、という発想に強く惹かれます。

私は海の子なので、アオサという季語の現場は近いものでした。太陽に透ける「あをさ」の緑はまさに春の海原の色であり、半透明のひかりを「ごりそこねし」と表現した点に舌を巻きました。最後の「くかも」という着地の是非は、評価の分かれるところではありますが、「あをさかも」の後の余韻は、つくづく「わたつみのごりそこねし」モノを眺めているかのような味わいだと思えました。比喩を核とした句ではありますが、美しい春の光りと麗らかな潮の匂いが実景としてもゆつくりと立ち上がってくる。それがこの句の真の力というべきかもしれません。

同時投句「あをさ寄すおのころ島の膝がしら／とおと」の「おのころ島」は、神々が最初に作った島のこと。イザナギ・イザナミの国生み神話には、春の石蓴の匂いが似合っているのだなあと感じ銘を受けました。

地

潮を視る暮しに揺れる石蓴かな ぐずみ

生活感があるという意味では、この句にも惹かれました。海辺の暮らしとはまさに「潮を視る暮し」。その日の満潮干潮が生活と密着しているのです。潮が引けば「石蓴」はペタリと石に張り付き、潮が満ちれば「石蓴」は揺らぎ始める。折々の「石蓴」の表情もまた春の風物詩です。

文語の「かな」に対して「揺れる」は口語。もし文語で統一するのであれば「揺る」となりますが、生活感という意味では原句の表記「揺れる」のままでもいいかな、と思います。

石蓴掻き海は豊かに濁りおる シュリ

石についた「石蓴」を掻くと、砂や石蓴屑によって潮は少し濁りますが、すぐに新しい潮と入れ替わります。そんな「海」の豊饒が美しい。「石蓴」を育てる。「海は豊かに濁りおる」という措辞もまた春の駘蕩たる気分です。

探鳥の長靴に寄る石蓴かな かまど

河口の「探鳥」なのでしょう。真水と海水が混じる辺りにも、さまざまな水鳥が集まります。鳥の姿を追ってレンズを覗いていると「長靴」に絡みついてくる「石蓴」に気づきます。春の磯の匂いが、急に濃く感じられる。そんな光景を思い浮かべました。

透きとほる子蟹を宿す石蓴かな つぎがい

「蟹」は夏の季語ですが、「石蓴」という季語の現場ではこのような光景にもお目にかかります。「透きとほる子蟹」は生まれたばかりの小さな蟹。「宿す」という動詞の選択は、評価の分かれるところですが、春の命の誕生のイメージを表現したかったのではないかと好意的に受け止めました。「透きとほる」という描写がよいですね。

やどかりの引きずつてある石蓴かな とぎい

こういう光景も見ますね!「やどかり」は春の季語ですが、こういう場合の季重なりは全く気にする必要はありません。「石蓴」が「やどかり」に引つ掛かっているだけなのではないかと、それを「やどかり」が「引きずつてある」と表現するのが愉快。まさに、春の磯のアルアル感です。

石尊養殖の現場にも吟行に行ったことがあるのですが、支柱となる杭に張られた養殖網を、舟に据え付けた機械がどンドン巻き上げ収穫する手際に驚きました。

陸揚げされてからの作業も面白かった！「石尊を洗うための洗濯機みたいな機械もありましたが、この句の「石尊専用脱水機」は、さらに食品に近いからこの工程で使われる機械なのかもしれません。「三代目」というのがいいですね。三代目の新しい機械を入れたのかもしれないし、人も機械も三代目なんだけど、これがなかなかガタが来てる？と読んでも愉快。機械のことだけを言ってるのに、人が見えてくるところがいいなあ。

石尊干す目視雲量二の空

くりでん

「目視雲量」とは、その名の通り、目で見た雲の量。「目視雲量三」は軽度の曇りだけ、お天気でいうと「晴れ」なのだそう。収穫した「石尊」を干すにはもってこいの青空。白い雲と緑の「石尊」のコントラストも美しい春です。

干されたる石尊ちりちりそそけだつ はまゆう

「石尊」の一物仕立て。よく観察し、言葉を選んでいきます。「干され」て乾いた「石尊」を「ちりちり」というオノマトペで表現した句はあるかと思いますが、下五「そそけだつ」という描写が巧い。「石尊」というモノの質感が表現されていますし、この下五によって中七のオノマトペにリアリティが加わります。

宮島の杓子を垂るる石尊かな

かもん丸茶

「宮島」という場所から「杓子」という俗なモノが現れ、さらに「垂るる」で何を掬ってるんだ？と思ったとたん石尊汁の「石尊」が目の前に突き出される。なんとも愉快な展開です。「宮島」の名物を二つ並べつつ、ちゃんと俳句にしてしまうのですから、なかなか大したものですよ。

しゃぼん玉

だま

《春》石鹼水や無患子(秋季)の実を溶いた液に、ストローの先を浸して吹くと、虹色を帯びた気泡の玉が空中に飛ぶ。古くからの子ども遊戯であり、春らしい景の一つであるとして春季とされている。

天

しゃぼんだま世界は二分後もあるか

亀田荒太

似たような発想から生まれる句がないとはいませんが、中七下五「世界は二分後もあるか」という問いかけにハッとします。世界を揺する核兵器の脅威、気候変動による環境破壊、耐性を進化させるウィルスの恐怖など、世界終末時計は今も刻々と進んでいます。

美しい「しゃぼんだま」を次々に吹く。次々に壊れていく「しゃぼんだま」を見上げながらふっと心を過る「世界は二分後もあるか」という思い。原爆が投下される二分前、大地震が起きる二分前、大津波が押し寄せる二分前、火山が噴石を噴き上げる二分前。「しゃぼんだま」を吹くという穏やかな日常に「二分後」の安全保証はないということ。2月20日に金子兜太先生が98歳の大往生を遂げられました。戦争を再び起こしてはいけない！と、兜太先生は様々な形で私たちに語り、その意志を繋いでいけと教えて下さいました。東京新聞「平和の俳句」の活動もその一つでした。俳句で平和を訴えていくこともできる。スローガンのような代物ではなく、詩の力でもって心を揺らすことができます。そう固く信じています。私たちはこれからも怯むことなく、このようなテーマにも挑んでいくべきだと、改めて肝に銘じた作品です。

地

ひゅおんひゅおん飛んでけししゃぼん玉お化け

めいおう星

「ひゅおんひゅおん」というオノマトペで、どんな「しゃぼん玉」なのかを映像として見せる。見事な表現です。盥の中のをせけん液に大きな輪っかを浸けて作る、あのタイプの「しゃぼん玉」ですね。最後の「しゃぼん玉お化け」という押さえも楽しい。

肺活量5500のしゃぼん玉

さるぼぼ@チーム天地夢通

これは「肺活量5500」ということは、大きな大きな一個の「しゃぼん玉」でしょう。みるみるうちに大きく膨らみ、ゆらりゆらりと光が渦巻き始める「しゃぼん玉」。数詞の効果に思わずニヤリとさせられました。

石鹼玉二十八個の肺活量

江口小春

数詞の句がもう一つ。しかも「肺活量」なのが面白い。違いは「二十八個」という単位です。こちらは次々に生まれてくる小さな「石鹼玉」を想像しました。発想は似ているのに、見えてくる映像が違うのも興味深いなあ。数詞って巧く使うと効果的です。

子でも居たつけ二階上からシャボン玉

雪華るな

この句にも数詞は入っていますが、こちらの眼目はむしろ「子でも居たつけ」という眩さです。「子でも居たつけ」という言い方で、このマンションの住人たちのお付き合い度が想像できます。確かあそこには子どもいらないように思ってたけど……という程度のお付き合い。「二階上から」降ってくる「シャボン玉」をしばし共有する麗かな時間です。

虹色に草やしやぼんの液倒る ウェンスデー正人

吹くとか、飛ぶとか、そういう発想だけではなかったのだね。外でシャボン玉やっていると、途中で飽きちゃって、こんな小さな事件も起こる。「虹色に草や」という映像展開が巧い作品です。

「しやぼんの液倒る」という表現を、季語「しやぼん玉」だとは認めないという考え方の俳人もいるだろうとは思いますが、季語「しやぼん玉」の現場で遭遇した小さな事件を瑞々しく切り取った作品であると考えます。若草も匂い立つような春です。

しやぼん玉香る花嫁達の時間

美しい情景です。結婚式の演出として「しやぼん玉」が使われているのだろうと想像しました。「香る」は「しやぼん玉」の匂いでありつつ、香り立つような「花嫁」の印象も思わせませす。「花嫁達の時間」とは、これからウエディングブーケが投げられる光景でしょうか。「しやぼん玉」の空に投げられる花嫁のブーケも美しく香り立ちます。

子の無くてすがしきからだ石鱈玉

小泉岩魚

「子の無くてすがしきからだ」というフレーズに、心がぎゅんとなりました。「無くて」というマイナスイメージ表現からの「すがしき」という展開が実に瑞々しい。「すがしきからだ」は、ひかりだけを閉じ込めた「石鱈玉」の映像とかさなってくるかのよう。美しく切なくすがししい心を抱えて吹く春の「石鱈玉」です。

しやぼん玉静かな自爆かかえとぶ

卯MOON

自爆テロという無残な言葉がニュースで報じられる昨今。「静かな自爆」という詩の言葉に、心が揺さぶられます。「しやぼん玉」が自ずと壊れるのは当たり前のことですが、それを「静かな自爆」と定義することで、新たな解釈が生まれます。「かかえとぶ」という押さえも巧いですね。

リリイ買われる石鱈玉こわれる 小倉じゅんまき

「リリイ」とは女でしょうか、男娼でしょうか。仔犬かもしれないし、小鳥かもしれません。さまざま「リリイ」を思い浮かべていくと、後半「石鱈玉こわれる」の味わいも変わっていきます。「リリイ」という名も「石鱈玉」もどこか切ない取り合わせです。

百歩ほどの仔犬の家出しやぼん玉 堀口房水

「仔犬」がいない！と慌てて、門を出てみると、ほんの「百歩ほど」向こうにいて、こちらを見つめているのでしょうか。「仔犬」の小さな「家出」という名の冒険。あつという間に連れ戻されてしまったのか、飼い主と一緒にもう少しお散歩を楽しんだのか。「しやぼん玉」との取り合わせが可愛い一句です。



俳句ポスト365 選者

夏井いつき プロフィール

1957年（昭和32年）生まれ。愛媛県松山市在住。8年間の中学校国語教諭の後、俳人へ転身。「第8回俳壇賞」受賞。俳句集団「いつき組」組長として創作活動&指導に加え、俳句の授業（句会ライブ）の開催、全国高等学校俳句選手権「俳句甲子園」の創設、「俳都松山宣言」起草にも携わるなど幅広く活動中。平成27年5月「俳都松山大使」に就任。平成29年4月から「帝塚山学院大学」客員教授。TBS「プレバト!!」俳句コーナー出演中。著書に句集「伊月集 龍」「伊月集 梟」「100年俳句計画」「雪の歳時記」寝る前に読む一句、二句。」「2択で学ぶ赤ペン俳句教室」「夏井いつきの美しき、季節と日本語」「夏井いつきの超力タン！俳句塾」「2018年版夏井いつきの365日季語手帖」など。



生誕150年

since 2017

— 松山から世界へ
そして未来へ —

2017年は、正岡子規と夏目漱石の生誕150年。
松山市では、2人の足跡と功績を体感できる様々な記念事業を
年間を通して行いました。